

京官時代の曾国藩

浅 沼 かおり

表1：曾国藩年表（嘉慶16年-咸豊2年）

年	干支	年齢	事項	学位・官職	上奏
嘉慶16年	辛未	1	10月11日に生まれる		
嘉慶19年	甲戌	4	妹・国蕙、生まれる		
嘉慶20年	乙亥	5	学問を始める		
嘉慶23年	戊寅	8	妹・国芝、生まれる		
嘉慶25年	庚辰	10	弟・国潢、生まれる		
道光2年	壬午	12	弟・国華、生まれる		
道光4年	甲申	14	弟・国荃、生まれる	長沙省城に行き、はじめて童子試を受ける	
道光6年	丙戌	16		長沙府試を受け、第7名となる	
道光8年	戊子	18	弟・国葆、生まれる		
道光10年	庚寅	20	末の妹、生まれる		
			衡陽唐氏家塾で学ぶ		
			姉・国蘭、王鵬遠に嫁ぐ		
道光11年	辛卯	21	漣浜書院で学ぶ		
道光12年	壬辰	22		応試、備取、侑生として注冊	
道光13年	癸巳	23	欧陽夫人が嫁入り	科試、県学に入学、提督学政は岳鎮南	
道光14年	甲午	24	岳麓書院で学ぶ 北京に入る	第36名の挙人となる、座主は徐雲瑞、許乃安、房考官は張啓庚	
道光15年	乙未	25	北京に残って勉強する	会試に不合格	
道光16年	丙申	26	都を出て江南を旅する	会試に再び不合格	
道光17年	丁酉	27	妹・国蕙、王待聘に嫁ぐ		
			長男・楨第、生まれる		
			上京する		
道光18年	戊戌	28	8月に休暇を取って都を出る、12月に家に到着	会試で第38名の進士、覆試一等、殿試三甲第42名、賜同進士出身、朝考一等第3名、道光帝により第2名に引き上げられる。翰林院庶吉士になる。会試の総裁は穆彰阿、朱士彦、呉文鎔、廖鴻荃、房考官は季芝昌	
道光19年	己亥	29	末の妹と楨第が種痘で亡くなる		
			妹・国芝が朱咏春に嫁ぐ		
			弟・国華が叔父・曾驥雲の養子になる		

道光19年	己亥	29	次男・紀沢、生まれる 北上する 日記『過隙影』を書き始める		
道光20年	庚子	30	都に入る 6月から病気、9月に回復 父・曾麟書、欧陽夫人、弟・国荃、次男・紀沢が都に入る	散館、二等第19名、検討になる 順天郷試磨勘官	
道光21年	辛丑	31	父・曾麟書、湖南に帰る 長沙府会館を管理する 長女、生まれる。のちに袁秉楨に嫁ぐ	皇上御門侍班 国史館協修官	
道光22年	壬寅	32	弟・国荃、都を出る		
道光23年	癸卯	33	次女、生まれる。のちに陳遠済に嫁ぐ	考試翰詹で二等第1名 四川正考官 翰林院侍講 文淵閣校理	「授翰林院侍講及四川正考官呈請代奏謝恩状(8月4日)」
道光24年	甲辰	34	三女、生まれる。のちに羅兆昇に嫁ぐ	文淵閣で侍班、経筵大典を助ける [賛] 翰林院教習庶吉士 分校庶常館 翰林院侍読	
道光25年	乙巳	35	癩疾がおこる 弟の国潢、国華が都に入る 李鴻章が会試のため都に入り、曾国藩の教えを受ける	会試同考官 詹事府右春坊右庶子 詹事府左春坊左庶子 翰林院侍講学士 日講起居注官 充文淵閣直閣事	
道光26年	丙午	36	弟の国華、納資入監 四女、生まれる。のちに郭剛基に嫁ぐ 弟・国潢、監生になり、南に帰る 祖母・王氏の訃報に接する		
道光27年	丁未	37	弟・国荃、府試案首をもって湘郷県学に入る 李鴻章、郭嵩燾らが進士となる	考試翰詹で、二等第4名 記名遇缺題奏 内閣学士、兼礼部侍郎銜 考試漢教習閱卷大臣 武会試正總裁 殿試読卷大臣	
道光28年	戊申	38	三男・紀鴻、生まれる 弟・国荃、科試一等、廩膳生となる 弟・国華、湖南に帰る	稽察中書科事務	

道光29年	己酉	39	長沙府会館を督修、湖広会館を修	礼部右侍郎	
			祖父・曾玉屏の訃報に接する	兼署兵部右侍郎	
			皇后、崩御	宗室拳人覆試閱卷大臣	
				順天郷試覆試閱卷大臣	
				順天武郷試較射大臣	
道光30年	庚戌	40	道光帝、崩御。咸豊帝、即位。	会試覆試閱卷大臣	「遵議大札疏 (1月28日)」
			弟・国潢が都に入る	朝考閱卷大臣	「応詔陳言疏 (3月2日)」
			五女、生まれる。のちに夭折	在署考試各省優貢	「請設壇祈雨疏 (3月4日)」
			弟・国葆、県試案首をもって湘郷県学に入る	兼署工部左侍郎	「条陳日講事宜疏 (4月4日)」
			夏、広西賊匪、大いに起こる	朝考拔貢閱卷大臣	
				考試国子監学正学録閱卷大臣	
咸豊元年	辛亥	41	弟・国潢、湖南に帰る	兼署刑部左侍郎	「議汰兵疏 (3月9日)」
				順天郷試搜検大臣	「議復宋臣李綱從祀文廟疏 (3月14日)」
				順天武郷試大主考	「敬呈聖德三端預防流弊疏 (4月26日)」
					「謝署刑部左侍郎恩疏 (5月27日)」
					「武闈復命摺 (10月17日)」
					「備陳民間疾苦疏 (12月18日)」
					「平銀価疏 (12月19日)」
咸豊2年	壬子	42	六女、生まれる。のちに聶緝崇に嫁ぐ	兼署吏部左侍郎	「謝署吏部左侍郎恩疏 (1月25日)」
			省親のため郷試終了後の休暇をもらう	江西郷試正考官に任命 (着任はできず)	「請寬勝保処分疏 (4月5日)」
			安徽省太和県境小池駅で母・江氏の訃報に接し、改服奔喪、帰宅する	本省団練郷民捜査土匪諸事務を幫同辦理せよとの上諭	「謝放江西正考官恩摺 (6月13日)」
				在家終制を願うが、湖南巡撫・張亮基や郭嵩燾の説得により、長沙に到着	

(『曾国藩全集』奏稿(一) 岳麓書社、1995年; 黎庶昌撰、李瀚章審定、梅季校点「曾国藩年譜」黎庶昌、王定安等編撰、李瀚章・李鴻章審訂『曾国藩年譜(附事略・榮哀録)』岳麓書社、2017年に拠る)

はじめに

- 1、家族
 - 2、学問と交友
 - 3、姻戚
 - 4、公務
 - 5、帰郷
- おわりに

はじめに

曾国藩が中国近代史のなかで異彩を放つのは、太平軍との戦いに身を投じて以降のことである。本稿ではそれ以前の半生を、家族・学問・友人・姻戚・公務などの面から整理し、後年の活動を考察するための準備作業としたい。この時期に培われた人脈や経験が、のちに太平軍や捻軍と戦い、天津教案などの難局に対処するさいの拠りどころとなるからである。

1、家族

朱東安氏によれば、系図上は曾国藩の「遠祖は曾参の15世孫である。西漢末に関内侯〔秦・漢の爵位〕として南遷して王莽の乱を避け、南方諸曾の祖となった。まず江西一帯に住み、のちに一支が湖南衡陽にうつり、湖南曾氏の祖先となった」とされている。曾氏の祖籍は衡陽であり、清初に孟学公という人が湘郷蓮塘都（都は県と郷のあいだに設けられた行政組織）の大界里に遷った。湘郷に遷った当初は富裕ではなく、曾国藩の高祖・曾応貞（字は元吉）の代になってようやく次第に豊かになってきた。曾国藩の祖父・曾玉屏（字は星岡）が嘉慶13年に白楊坪に遷居し、100畝あまりの土地をもつ地主になった。白楊坪は「辺鄙で小さな山村」で、湘郷・衡陽両県のあいだの高峯山のふもとにあり、湘郷県城から120里離れていた。白楊坪一帯は丘陵山区で「風景は秀麗だが、情報は閉塞し、文化はかなり遅れていた」*¹。

当時の湖南省の状況を、朱東安氏は次のように概括している。道光年間、湖南省は後進的で、知名の士も少なかった。民族構成も複雑で、動乱が頻発し、社会環境は不安定であった。地理的にも、北は洞庭湖に阻まれ、山がちで、全国の政治文化の中心から遠く隔たり、文化の発達した江浙地区とは往来が少なかった。こうした事情によって、湖南士人の思想は保守的になり、外部思想の影響を受け入れるのは容易でなかった。湖南学術界では程朱理学（漢・唐代の訓詁学に対し、宇宙の原理としての理を究明し、人間の本性を明らかにしようとしたもの。宋学の中核）が主流であり、経世致用（学問は世を治め、実益を増進するものでなければならないということ）が重んじられた。訓詁学（中国古典の文字や章句の意味を解釈する学問）や考据の学（経書などの古典を文献学的・実証的に研究する学問）が興っても、湖南における影響はわずかで、湖南の文士の多くは理学を習い、漢学を習うものは少なかった。岳麓書院と城南書院の二大書院では、乾隆・嘉慶年間以来、宋学を講習し、実用を重んじ、「曾国藩集団を培育する思想教育基地になった」のであり、曾国藩、胡林翼*²、左宗棠*³、羅沢南、郭高燾、劉蓉、劉長佑*⁴、曾国荃らはいずれも、岳麓書院でなければ城南書院で学んだ*⁵。

曾国藩は嘉慶16年10月11日（1811年11月26日）に白楊坪の「白玉堂」で生まれた。「白玉堂」はいわば第一故居であり、第二故居が「黄金堂」、第三故居が現在、曾国藩故居として整備されている双峰県荷葉鎮富托村鰲魚山のふもとの富厚堂である*⁶。乳名は寛一、道

光10年に学問をするために衡陽に行ったとき名を子城、字は居武とした。道光11年に濂生と改号し、道光18年に進士に合格してから国藩と改名した^{*7}。祖父・曾玉屏は、「若いとき遊惰で働かず、いつも馬で湘潭に乗り付けて金持ちの子弟たちと遊んだり、盛り場で遊んだり、あるいは昼日中まで寝ていたりした。のちに人に戒められて、馬を売り払って歩いて帰宅し、それ以後、終生未明に起き、家業に力を尽くした。家には当時梯田があったが、作男を指揮して石を穿ち地を開き、日夜刻苦し、ついに梯田を広々した平らな土地にしてしまった」というやり手だが、「独断的な顔役 [武断郷曲的小土棍]」であり、家ではいっそう「専制暴君」だった。曾家はそれまで科挙と縁がなかったが、曾玉屏は息子の曾麟書（曾国藩の父、字は竹亭）が功名を挙げることを願った。なかなか合格しない息子に曾玉屏は「いつも堪えがたい責罵を加えた」。曾麟書もまた期待を息子たちにつなぐようになった。曾麟書は道光12年、43歳のとき、17回目の受験でようやく生員となり、湘郷県学に入学した。それは息子の曾国藩が入学する、わずか1年前のことであった^{*8}。

曾国藩は長男であり、一姉、三妹、四弟がいたが、一番下の妹は夭折した。次男の曾国潢は字は澄侯、輩行が四なので老四と呼ばれた。三男の曾国華は字は温甫、老六と呼ばれた。叔父の曾驥雲には息子がなかったので、道光19年に曾国華が養子に入った。四男の曾国荃は字は沅甫、老九である。五男の曾国葆は字は季洪、のちに曾貞幹と改名し、字は事恒とした。曾国葆は一番下の弟だったので、曾国藩は季弟と呼んだ^{*9}。18歳も年の離れた曾国葆は、本稿であつかう時期の曾国藩の日記や手紙にはほとんど登場しない。叔父の曾驥雲夫妻は分家せず、同居していたようである。

曾国藩は嘉慶20年に5歳で勉強を始めた。14歳のとき、父の友人・欧陽凝祉（号は滄溟）が家塾を訪ねてきて、曾国藩の作った詩をみて前途を期待し、娘を曾国藩の妻にと申し出た。曾国藩は20歳から衡陽唐氏の家塾、ついで湘郷県の漣浜書院で学問し、道光13年、23歳で県学に入学した。同年、欧陽氏を妻に迎えた。長沙の岳麓書院に入ったのは道光14年、24歳のときであり、この年に第36名で挙人となる。道光15年の会試に落ちてから北京で勉強したが、翌16年の会試（恩科）にも合格できなかった。江南を経由して帰郷したが、途中、金陵で本を買う^{*10}ため、衣類を質にいれ、二十三史を買った。一年ほど外出せずに猛勉強した。道光17年、27歳のとき会試受験のため北京に向かう。親戚に借金し、32緡の銭をもって出かけるが、都に着いたときに残っていたのはわずか3緡だった。道光18年、28歳で殿試三甲第42名、賜同進士出身となった^{*11}。

一つ逸話がある。殿試で三甲だった曾国藩は「大耻とみて、荷物をまとめて都を出ようとした。朝考は受けなかつもりだった。友人に引き留められてはじめて思い留まった。朝考は一等第2名であった（進呈は第3名であったが、道光帝がみずから第2名にした）」^{*12}。朱東安氏のよりわかりやすい説明によれば、「曾国藩は進士になったとき、三甲だった。過去の慣例からいって、三甲進士の多くは翰林に入れない。曾国藩は羞じ憤り、『即日車を雇って帰ろうとした』。勞崇光（すでに翰林院編修、「高官のあいだで有名であった」）があれこれなだめて堅く引き留め、彼を手伝うと約束したので、ようやく曾国藩は気持ちを変えて、朝

考に参加した」*¹³。勞崇光（1802-1867）、字は辛階・辛陔、湖南省長沙府善化県人、道光12年の進士、庶吉士である*¹⁴。朝考では、晴れて翰林院庶吉士になることができた*¹⁵。

道光18年8月に休暇をとった曾国藩は、12月に湘郷の家に着いた。この帰郷のとき、祖父の曾玉屏は曾麟書に、「わが家は農家である。富貴となっても、旧を失ってはならない。あれは翰林になったが、これからというときのだから〔事業方長〕、わが家の家計〔食用〕に気を遣わせて、心配させてはならん」と言った*¹⁶。祖父の言葉をきいた曾国藩は「感動し、清貧を守ることを誓った。今日に至るまで、この一言に従っているのだ」とのちに語っている*¹⁷。朱東安氏の言葉を借りれば、「曾国藩は祖父を崇拜」しており、自分と曾国荃は督撫（総督・巡撫）にまでのぼったが、「その威厳と智略は曾玉屏に遠く及ばない。ただ機会がなかったので、祖父は山林で生涯を終え、その志を発揮できなかつただけだと考えていた」*¹⁸。

故郷に錦を飾った曾国藩は「把戲」*¹⁹をした。道光19年11月に家を離れるまでに、1200軒前後の家を訪ねて約1500両の金を集め、北京への途上でも500両あまり贈られたので、合計2000両前後を手に入れた*²⁰。後年、曾国藩はこの「把戲」をいたく後悔している。「己亥〔道光19年〕の年から外で把戲したのは、いまだに痛恨事〔恨事〕である。将来万一外官になったら、あるいは督撫あるいは学政、以前私に情を施した者はあるいは数百あるいは数千、みな手ぐすね引いて待っている〔釣餌〕。もし任地に来たら、これに応じなければ酷薄で良くないし、応ずるとすれば1に10を報いても、その欲を満たすには足りない。それゆえ庚子〔道光20年〕に都に来てから8年になるが、軽々しく人の恵みは受けていない。人を助けることはあっても、絶対に人の助けは受けない。将来もし外官になっても、京城内には、私にお返しを求める者はいない」*²¹。

道光19年11月に湘郷を発ち、北京に着いたのは道光20年1月であった。同年4月に散館し、二等第19名、檢討（従七品）となった*²²。曾国藩は北京で宣武門外の千仏庵、達子營の関帝廟などで暮らしていたが、病のため果子巷の万順客店に移り、欧陽兆熊と同居した。7月から8月にかけて17日間も「薬水のほかは、何一つ喉を通らなかつた」と重篤であったが、欧陽兆熊と呉廷棟の介抱により、一命をとりとめることができた。欧陽兆熊、字は小岑（暁岑）、道光拳人、湖南省長沙府湘潭県人、これ以後、曾国藩と仲良くなった*²³。呉廷棟（1801-1873）、字は竹如、安徽省六安直隸州霍山県人、道光5年の拔貢、刑部七品官から郎中となる*²⁴。

11月19日に「父の手紙を受け取り、家族がすでに10月11日に出発したことを知った」*²⁵。曾国藩は、慌てたのではないだろうか。棉花各条胡同、椿樹三条、醋張胡同などで家探しをしている*²⁶。12月13日には「琉璃街に家を見に行く。その家の近くの蔣君を訪ねる。話していて知ったのだが、この家にはかつて狄聴先輩の夫人である王恭人が住んでおり、この家で殉節した。京城の住まいは縁起が良いのがよい。恭人が殉節したというのは非業と言わざるをえず、この家もまた不祥と言わざるをえない。『忠、節』の二字は、あとから徳行〔芳徽〕と仰がれるが、そのときには家門の幸ではない。さらにこの家は家賃が高く、部屋が多過ぎ、住みたいわけでもない。この日、棉花六条胡同の家に決め、2カ月分の家賃を払った」*²⁷。

父の曾麟書、妻の歐陽氏、弟の曾国荃、息子の紀沢の一行は、道光20年12月に都に着いた^{*28}。曾国藩は父と、同県人ばかりを招いて二席〔席〕の宴席を設けたりしている^{*29}。会場は「東麟堂」、前門外桜桃斜街路南にあり、正式の宴席を請け負う〔包辦官席〕店であった^{*30}。円明園や午門内などを見物した^{*31}あと、曾麟書は道光21年閏3月14日に北京を発った^{*32}。九弟・曾国荃はせっかく都に連れてきてもらったのに、まもなく湖南に帰りたがった。道光21年9月に「九弟がひどく南に帰りたがっています。どうしてかわかりません」^{*33}と曾国藩は述べている。曾国荃は道光22年7月に北京を離れた^{*34}。「私たちは絶対に仲違いしたわけではないこと」^{*35}を曾国藩は祖父母に訴えている。曾国荃は道光27年7月、府試に首席で合格して湘郷県学に入り、翌28年7月には科試で一等となり、廩膳生になった^{*36}。

曾国藩は四弟・曾国潢と六弟・曾国華も都に呼んでやった。「九弟は都に来て、思い通りになりましたが、四弟と六弟はまだです。年々家園で守株し、(中略)これらのことから不満を抱えこんでいるので、四弟と六弟が私を恨むのは無理からぬ事です」^{*37}と曾国藩も書いているが、湘郷の家塾で読書するのは弟たちの望むところではなかった^{*38}。道光25年9月に曾国潢と曾国華が都に着いた^{*39}。四弟・曾国潢は生涯、湘郷で家を守ることになる人である。六弟、九弟は「上等の素質」、「四弟は中等の素質」^{*40}という曾国藩の評価をみると、学問にはあまり向いていなかったようである。曾国潢は、国子監の監生にしてもらうことで納得し、湘郷に帰って家事にあたることになった。「四弟も喜んで感謝し、家で父上母上を助けて家の面倒をみる、もう小考〔生員になるための試験〕は受けないと言っています。私もそれが良いと思います」^{*41}。曾国潢は道光26年10月に南に帰った^{*42}。もっともすっかり落ち着いたわけではなく、道光28年5月には、「金儲けして買官〔発財捐官〕したい云々」と手紙に書いて、「上調子〔浮躁気習〕」^{*43}と曾国藩にたしなめられている。

六弟・曾国華は道光26年に捐納して国子監生となり、北京で順天郷試を受験したが失敗した^{*44}。道光28年の曾国藩の手紙によれば、曾国華は毎月5両で家庭教師〔家館〕をすることになった。曾国藩は京官であり、暮らし向きはそれほど窮迫していない。実の弟1人養えず、貧乏書生の職を奪う、というのに賛成ではなかった。国華の妻は病気だというし、二品官の曾国藩は翌年の順天主考になる可能性があるのも、国華が北京にとどまっても回避で受験できないかもしれない、などの事情を考え合わせて「南帰を勧めたい」^{*45}。おまけに、「以前四弟が都にいたときは一切の瑣事をやってくれた」のに、「六弟は全く管理できない」ので、「南帰するよう口を酸っぱくして勧め〔苦勸〕」た^{*46}。道光28年9月、祖父の病氣^{*47}という事情もあり、曾国藩は曾国華を湖南に帰した。道光30年7月、曾国華は県試に首席で合格し、湘郷県学に入った^{*48}。その後も、「もともと天分は諸弟のなかで一番なのに、不平が多く、非常に怠け者」で、「読書人のなかでもっとも順境であるのに、ややもすれば怨みでいっぱい、何もかも思い通りにならないと言う。実に私の理解できないところである」^{*49}と、曾国藩はこの弟とはかみ合わないところがあった。

曾国藩は家族に、地元の政治に関わらぬよう繰り返し頼んでいる。早くも道光25年5月には、次のように書き送っている。「我が家はすでに郷紳ですから、絶対に、役所に行って公

事に干渉して、官長に軽蔑されてはなりません。家に何かあれば進んで損をして、絶対に、人と訴訟を起こして、権力を笠に着て人をいじめる、と官長に疑われてはなりません」*50。同年10月には叔父夫婦にあてて、「私は現在都で四品、地方官に任命されれば臬司〔按察使〕です。およそ郷紳が公事にかかわれば、地方官で怨みを抱かない者はいません。有理無理にかかわらず、自分のことでなければ、すべて干与すべきではありません。地方官はうわべは応待しますが、心では軽蔑します。もし地方官にあなどられ疏略にされれば、私は官職にありながら、身内が侮辱を受けるのを免れません。(中略)以後、何事であろうとも、県は行かないよう、事に関わらないよう、正規の納税であろうとも、県には人に行かせるよう父に勧めてください」*51。

咸豊元年のことだが、湘郷県では、代理知県の朱孫貽*52が人々の好評を得ていた。曾國藩は咸豊元年7月に、「朱明府〔明府は清代には知県の尊称*53〕は民心を得ている。私はすでに人に托して上のほう〔上游〕に手紙を送り、我が県に長く留めてくれるよう頼んだ」*54と述べている。だが、その一方で、朱孫貽を引き留めるため、県の欠損〔虧空〕の穴埋めに協力することには強く反対した。咸豊元年8月の手紙では、

金を工面して官の欠損を埋めるのに、我が家は絶対に尽力してはならない。欠損は1万6千両、大錢で3万余千である。都ごとに千串割り振らなければならない。今、数人の大紳士が一時の豪気で、急公好義〔公事公益を励み正義を行う〕の言葉を口にしてにすぎない。将来割り当てることになれば、巧者・強者はたいして出さなくても官の前で良い顔ができるが、拙者・弱者は多く出しても人の圧迫〔勒〕を免れない。貧しい郷の豊かな小戸は必ず怨声でいっぱいになる。またこれが一度始めると、次に他の官がきたとき、師〔不詳〕知県が錢をかりて執務〔辦公〕したこと、朱知県が民の助けをかりて穴埋め〔墊虧〕したことを引き合いに出す。あるいはまた民間に割り当てて金を出させて自分を助けさせようとする。そうならば断る言葉がない。もし協力が慣例になれば、新しい官が来るたびに助けることになり、我が県に今後安息の日はない。およそ公務を行うには深謀遠慮が必要である。もし紳士たちがこれをしたければ、我が家が阻止する必要はないが、我が家が提議〔倡議〕するのは絶対にだめである。それに官の任命〔補缺〕にはみな融通のきかない決まり〔呆法〕があり、どのポストがでてどの班に順番が回ってきて補されるかは巡撫・布政使といえども少しも変えることはできない。澄弟は外に何年もいたのだから、知らないわけはあるまい。朱公は、もし順番が来なければ〔不輪到班〕、欠損を埋めるのを手伝い、全县で引き留めても、慣例に阻まれてだめである。もしすでに順番が来たのであれば、欠損が埋まらなくとも、このポストに任命されないことはない。特に融通をきかせようと、督撫がそのために上奏して〔專摺〕願い出ても、慣例は大きく変えられない。季弟の手紙では、朱公が実授されるか否かが、欠損を埋められるか否かにかかっていると思っているようだが、おそらくそのとおりというわけではない*55。

2、学問と交友

道光20年、「而立」(30歳)の曾国藩は、次のように日記に書いた。

辛卯の年〔道光11年〕に、号を滌生と改めた。滌は、旧染の汚を洗い流すことである。生は明の袁了凡^{*56}の「以前の様々なことは、昨日死んだようなものである。以後のさまざまなことは、今日生まれたようなものである」という言葉からとった。改号して9年たつが、あいかわらず学ばず、嘆かずにいられようか。今年すでに30歳である^{*57}。

「做官発財」(官になって金持ちになる)によって子孫に金を遺さないと誓いを立てた^{*58}のも30歳のときであった。

清朝は皇太子を立てず、皇子たちは上書房で教育されたので、「詹事府〔東宮で太子を輔導する官〕の諸官は何もすることがありません。翰林院のように儲才養望の地であるにすぎません。私はこの職にあつて、以前どおり毎日読書を仕事としています」^{*59}と道光25年に書いているように、翰林院や詹事府にいた頃の曾国藩には時間がたくさんあった。後年の殺伐とした戦いの日々と比べると、嘘のようにのどかな時期である。都・北京の文化的環境で、友人たちと切磋琢磨しながら存分に学問に励むことができた。同治9年、幕僚・趙烈文と最後にあつた日、曾国藩は「何度も若き日の京師でのことを話して笑った」^{*60}という。彼にとって人生最良の時代だったのではないだろうか。

朱東安氏は、清代の学術潮流を以下のように俯瞰している。清初の皇帝たちはいずれも程朱理学を極力唱道した。一方、漢族士人たちは考据の学によって程朱理学に打撃を与えようとしたので、宋学と漢学の争いという形となった。清代の漢学家は考証を通じて、直接的には理学、間接的には清朝統治者に打撃を与えようとした。だが嘉慶年間の白蓮教徒の乱の衝撃は、この状況を一変させた。民衆反乱を鎮圧して清王朝の統治を保つこそ、自分の身や地位を保つことができると思い直した漢族知識人の政治的態度は根本的に変化した。考据学は道光年間に衰えを見せ、経世致用の学が学術上、支配的な地位を占めるようになった^{*61}。

曾国藩がまず志したのは理学であり、唐鑑に教えを受けた。唐鑑(1778-1861)、字は翁沢、号は鏡海、湖南省長沙府善化县人、嘉慶14年の進士、庶吉士、官は太常寺卿、江寧布政使にのぼった。イギリス軍が侵入したとき、琦善や耆英が国を誤ったと上疏弾劾して正義の名声を得た人である^{*62}。琦善(1790-1854)、博爾濟吉特氏、字は静庵、正黄旗満洲、世襲一等侯である。欽差大臣として広州に派遣されたが、イギリス軍が香港を占領したため、革職逮捕〔逮治〕、家産没収〔籍没〕、執行猶予つき絞首刑〔絞監候〕となったが、道光22年にはふたたび起用される^{*63}。耆英(1790-1858)、清朝宗室、字は介春、正藍旗満洲で、南京条約、望厦条約、黄埔条約などを締結した^{*64}。曾国藩が休暇後に上京した道光20年は、アヘン戦争が勃発した年である。道光21年4月には、「琦善はすでに14日に北京に護送されてきました」^{*65}と書き送っている。日記や手紙を見る限り、彼はそれほどこの戦争を重大視してい

ない。北京も平静で、「京城の人心は何事もない時のように静かです。日ならずして殲滅できるでしょう」*⁶⁶と道光22年4月に書いており、南京の講和についても、同年9月に、「このたびの講和〔議撫〕は、実にやむを得ないことです」*⁶⁷という。

道光21年7月、「曾国藩は瑠璃廠で宋代理学家・朱熹の『朱子全書』（『朱子全書』ともいう）を買ってきて、帰宅後すぐに読み出した。（中略）3日後、同郷の先輩である唐鑑のところに教を請いに」行き、「検身の要、読書の法」を問うたところ、唐鑑は「『朱子全書』を宗とすべきだ」と述べ、さらに「近頃、河南の倭良峰（仁）先輩の努力が最も篤実である。毎日朝から寝るまで、一言一動、坐作飲食、すべて覚え書き〔札記〕がある。心に克服できない私欲があれば、外からはわからないものもすべて書く」と教えてくれた*⁶⁸。倭仁（1804-1871）、烏齋格里氏、字は良峰、号は良斋、正紅旗蒙古、道光9年の進士、庶吉士、文華殿大学士にのぼる。咸豊・同治年間の理学大師である*⁶⁹。

曾国藩が理学家の厳格な要求に基づいて修身を始めたのは道光22年冬のことである*⁷⁰。仔細に自己点検してみると、欠点がたくさん見つかった。まずタバコである。道光21年9月1日、「この日は早起きして喫煙する。口は苦く舌は乾き、タバコは有害無益であると思うが、いっときも離れられない。（中略）今後は永遠に喫煙しないと誓い、水煙袋をたたき壊した」*⁷¹。道光22年10月21日に「毎日ぼんやりしている〔昏鋼〕のは喫煙が多すぎるためだと思うので、ただちに煙袋を壊し、もう二度と吸わないことを誓う。もしまた食言したら、雷に打たれて死ぬ」*⁷²と書いており、「10月21日には永遠に水タバコを吸わないという誓いをたてた。すでに2カ月タバコを吸っておらず、すでに習慣になり自然になった」*⁷³と禁煙に成功した*⁷⁴。囲碁についても、「筠仙〔郭嵩燾〕と囲碁二局、頭がふらふらして目がかすむ、もう二度と碁はしない」*⁷⁵、しかし翌日も「筠仙と囲碁、昨日の轍を踏む」*⁷⁶。郭嵩燾（1818-1891）、字は伯琛、号は筠仙・雲仙、湖南省長沙府湘陰県人、道光27年の進士、庶吉士である*⁷⁷。「永遠に囲碁を戒める。もしまた碁をしたら、書香〔読書人の家柄〕が永遠に絶えると誓う」*⁷⁸と道光24年5月に言っているが、囲碁はやめられなかった。

虚栄心も反省の種であった。「詩を作るとき、他人を圧倒しよう、名誉を得ようとするのみである」*⁷⁹、「今朝、功名心〔名心〕が大いに動き、大作〔巨編〕を物して天下の耳目を震撼〔震炫〕させたいと思った。盗賊の心であり、醜い」*⁸⁰。怠慢で、何をしても長続きしない。親友の陳源究は苦言を呈してくれた。陳源究（?-1853）、字は岱雲、湖南省長沙府茶陵州人、道光18年の進士、庶吉士*⁸¹、曾国藩の「同郷」であり「同年」でもある。「岱雲は、私はなによりも『慢』の字を戒めなければならない、怠慢の気があらわれていないところはないと言う。まさに膏肓をつく言葉である。また言う、私はいつも友人に対して、恃むところ深すぎ、量ってから入ることを知らず、随処で限度がない。小さければ齟齬を生じ、大きければ仇となる〔凶隙〕から、慎まなければならない。また言う、私は事に当たるとき、明敏〔精明〕でないということはないが、酷薄すぎるきらいがあるので、いつも注意しなければならない。この三言はいずれも薬石である。（天頭〔紙面上部の空白部分。そこに書かれたコメントであろう〕：そのとおり〔直〕である。岱雲は友誼にあつい）」*⁸²。「私の病根

は恒心がないこと〔無恒〕にある」*⁸³。

じっとしていられなかった。「昨日今日、用もないのに外出する。こんな大風が吹いているのに、静座していられない。どうしてこんなに上調子〔浮躁〕なのか」*⁸⁴、「動を好み、静を好まない」*⁸⁵、「また外出して岱雲のところに行く。静座していられず、外出するしかない。(天頭：心が閑に耐えられないのは悪癖〔病〕である。)禁煙以来、気持ちが落ち着かず〔心神彷徨〕、魂が抜けた〔無主〕ようである」*⁸⁶、「また寝坊した。本当に低級〔下流〕である。樹堂〔馮卓懷〕が来る。(中略)静座をおいて他に手はない、静座できれば天下の事は終われりという」*⁸⁷。馮卓懷、字は樹堂、湖南省長沙府長沙県人、道光24年、朝夕曾国藩の教えを受けるために条件のよい仕事を棄てて、曾紀沢の家庭教師になった。またのちに曾国藩の軍が祁門で窮していたときには四川万県の知県の職をなげうって麾下に投じて幕僚になった*⁸⁸。「古文1巻に標点をつけ〔点〕、小半時静座するとぐったりして眠りたくなる、恨めしい限りである」*⁸⁹。

道光22年「10月1日に生まれ変わるという志を立て〔立志自新〕て以来、あいかわらず懶惰だが、毎日楷書で日記を書く、毎日10頁歴史を読む、毎日茶余偶談を一篇書く、この三事は一日も中断したことがない」*⁹⁰。だが、同年11月23日には「立志自新から50日あまり、一つの過ちも改められていない」*⁹¹。道光22年の年の暮れには、「昨夜は寝付かれず、また無駄に1年過ごしてしまったと思った。一事もなせず、志は立てず、過ちは改めない」*⁹²。道光23年3月には「昨夜、自らをうらみ、猛省〔痛自猛省〕」*⁹³と枚挙に暇がない。小事にこだわるのも悪い癖で、「細かいことを一晚中ためらい、小さな気にくわないこと〔忤〕に終日こだわる〔粘沾恋〕」*⁹⁴、「小事がうまくいかないで、くよくよして〔心緒煩悩〕、終日なにもできなかった。狭量〔胸懷淺鄙〕の極みである」*⁹⁵。「下人が口論〔口角〕し、私も腹を立てたので、解雇した。1日不快であった」*⁹⁶、翌日になっても「まだ昨日のことで、心が乱れている」*⁹⁷。

「私には三大過がある」と曾国藩は言う。「平素、信じず敬わず、恃むところ深すぎる、これが一。近頃、一語合わないで無礼を憤り恨む、これが二。意見が衝突した〔齟齬〕あと、人はかえって親しくなる〔平易〕ものだが、私は逆に強硬になる、ひねくれている〔不近人情〕、これが三である」*⁹⁸と書いている。だが決して人嫌いではなく、社交の人でもあった。「客が来て、八股文〔時芸〕を見せる。心にもないお世辞を言ってしまう。私はこの悪癖〔病〕が深い。孔子のいう巧言令色〔巧令〕、孟子のいう飾〔取り入る〕とは、私のことだろうか」*⁹⁹。「樹堂は、私には客をとりもつ言葉〔周旋語〕があり、不誠実だと言う」*¹⁰⁰。「座でははなはだ愉快でなかったが、強いて嬉しそうな顔をした。天下の小人の墮落〔失足〕のはじめもこのようであると知る」*¹⁰¹。曾国藩は座談や冗談が好きだった*¹⁰²。「この日話したことは笑談が多く、放縦すぎたと思う」*¹⁰³、「諧謔を言ってしまった。慎みがなさすぎた」*¹⁰⁴、道光22年11月には「以後は、多言を戒めること、喫煙を戒めるごとし。もしまたでたらめを言ったら、雷に打たれて死ぬ」*¹⁰⁵と書いている。

自ら省みて不謹慎と思われることも多かった。「母の58歳の誕生日である。(中略)この

日は寿面〔誕生祝いに食べる麵〕を用意できなかつた。節約のためである。しかし（中略）家内が服が買いたいと言ったら良いと思った。どうして軽重がわからないのか^{*106}、「友人が妾を納れたので、会わせてもらいたいと思った。なれなれしく、大いに不敬である」^{*107}。野次馬根性もあり、斬刑があるという「デマが流れ、刑場に見に行こうと人に誘われて喜んで従った。仁愛の心が失われた」^{*108}。酒の場で「この日ひどく暑く、くたくたになった。座でみながちゃんとしているのに、私だけ長衣や帽子〔袍帽〕を脱いで、粗野であった」^{*109}。

仲間と日課冊を交換して研鑽に励んだ。「樹堂が昨日、日課冊を送ってきた。私が今日の午刻に一通り精読して、いいかげんにコメントしたら、樹堂は深く採録した。私の10倍謙虚である。私を見せてくれというのが、あまり誡めよう〔規彈〕とはしない。どうして樹堂は己を責めるのみ、私は人ばかり責めるのだろうか」^{*110}。「長峰先輩が日課冊を届けて見せてくれた。また私のこの冊にコメントをくれたが、読むとぞっとして汗が出た。私に、すべて一掃して別人になれと教えている。どうしてこの薬石の言を得られようか」^{*111}。「竹如〔吳廷棟〕は私に『耐』を教える」^{*112}。「蕙西〔邵懿辰〕は面と向かって私を責めた。一に慢、交友が長く敬意をもって続かない。二にひとりよがり〔自是〕、詩文を見て己の意見に固執することが多い。三に偽、人に対していくつかの顔ができる。よく言ってくれた〔直〕、我が友よ。日々大悪をふみながら知らなかつた」^{*113}。邵懿辰（1810-1861）、字は位西（曾國藩は蕙西と表記している）、浙江省杭州府仁和県人、道光挙人、内閣中書、刑部員外郎、軍機処に入値した^{*114}。

「湖広館に行った。非常に静かなのが好きなので静を養う所にしようと思う。朝出て暮に帰る」^{*115}。引越しもした。「交際は日に日に多くなり、また根が上調子〔浮躁〕なので、どうして本当に静養できようか。内城に転居すれば、意味の無い往来を半分にすることができるが、まだ〔家を〕探せていない。（中略）吳竹如は近頃往来が非常に密だ。来ると一日中話している。その言うことはすべて修身治国の大道理だ。（中略）竹如は私に内城に引越すように、城内の鏡海先生に師事できるし、倭長峰先生、寶蘭泉〔寶埜〕に友事できると言う。（中略）鏡海、長峰両先生も急いで引越すよう私に勧めるが、城外の友で、いつも会いたいものが数人いる。邵蕙西〔邵懿辰〕、吳子序〔吳嘉賓〕、何子貞〔何紹基〕、陳岱雲だ」^{*116}。寶埜（1803-1862）、字は蘭泉、雲南省曲靖府羅平州人、道光9年の進士、吏部主事、吏部郎中、監察御史、宋儒の学を講求した^{*117}。吳嘉賓（1803-1864）、字は子序、江西省建昌府南豊県人である^{*118}。何紹基（1799-1873）、字は子貞、号は東洲、湖南省永州府道州人、道光16年の進士、庶吉士、四川学政などをつとめる^{*119}。曾國藩は道光24年「3月24日に前門内西側の碾兒胡同に移居し、城外とは消息が通じなくなった」^{*120}。

だが結局、曾國藩は厳格な道学先生にはなれなかつた。朱東安氏の軽妙な一節を以下に引用してみたい。道光21年7月、先述のように、唐鑑が倭仁の修身方法を教えてくれたが、

曾國藩は完全にそのとおりにしなかつた。毎日『朱子全集』を読むことに専念したが、修身の覚え書き〔札記〕は書かず、静座もしなかつた。このような情況が道光22

年10月1日までつづき、曾国藩は倭仁に修身の道の教を請うた。(中略) 帰ってから、曾国藩は倭仁のいうとおり、修身日記をつけた。毎日1時間 [半個時辰] 静座し、封建聖道にあわない自分のさまざまな考えや行為を記し、しょっちゅう自分の日記を、呉廷棟、馮卓懷、陳源亮らに渡して読んでもらい、心得と体験を交流した。曾国藩はさらにいつも自分の日記を渡して倭仁に目を通して指示してもらった。(中略) 最初、曾国藩は「静座思」になれず、いつも静座するとまもなく眠ってしまい、夢境を離れるとすでに半日過ぎていた。(中略) 十数日たってようやくゆっくりと慣れてきた。しかし、彼は2カ月あまりこうしたあと、考えを変えた。もともと曾国藩の体質は虚弱だった。毎日真剣にやりすぎたために、まもなく不眠症になり、一日中元気がなかった。さらに20日ほどがんばったところ、突然吐血した。これ以後、体が弱り、気持ちが晴れなかった。もう苦勞して修業して、理学の専門家になろうとは思わなかった^{*121}。

理学を棄てる気はなかったが、曾国藩のなかで古文が主要な地位を占めるようになった。道光20年以來、桐城派(清代の古文家の一派、典雅と平淡を尊ぶ)にまなび、古文に強い関心をもつようになっていた。曾国藩が文章を理解し、古文に対する興味を深めたのは桐城の姚鼐^{*122}の『緒論』を読んだことによる。枝葉末節として軽視していた考据学(考証学)に対する見方も変わった。道光26年9月、城南の報国寺で療養中の曾国藩は段玉裁^{*123}の『説文解字』を読んでいたが、同じくそこに住んでいた劉伝瑩に教を請うた。劉伝瑩(1818-1848)、字は椒雲、湖北省漢陽府漢陽縣人、道光拳人、国子監学正をつとめ、古文経学をおさめ、考据に精通していた^{*124}。「古の道を知るものに、文字に明るくないものはいないと知りました。(中略) 先王の道を明らかにしようと思うなら、文字を詳しく研究するのを要務とせざるをえません。(中略) 道を崇び文を貶める諸儒の説には、とくに付和雷同[雷同而苟随]することができません」^{*125}と曾国藩は述べている。とくに愛好したのは司馬遷、班固、杜甫、韓愈、王安石の文章であり、日夜これを朗誦していた^{*126}。

当時の北京で古文の領袖的存在だったのは、梅曾亮である。梅曾亮(1786-1856)、字は伯言、江蘇省江寧府上元縣人、道光2年の進士、戸部郎中となり、京師に20年余り住んだ。桐城派後期の重要な著述家である^{*127}。浅井邦昭氏は、梅曾亮は「高潔な人格や詩古文への造詣において並ぶ者がなかったため、20年あまりにわたって、京師で大きな影響力を持っていた。その間、彼を中心として、詩文の応酬や作品の批評などが活発におこなわれた。その結果、梅曾亮らはみずから桐城派の正統と見なすようになる」と述べ、彼を中心とした人々を「京師桐城派」と呼ぶ。梅曾亮が帰郷した道光29年前後、このグループの人々は次々に都を離れるが、太平天国の「混乱のなかでも、彼らは京師での生活を懐かしみ、現地でも同じように詩文を応酬し続けた。晩清の社会不安のなか、京師桐城派の活動は地方に舞台を移していく。その結果、一時的な流行に終わることなく、文学流派として各地に根づいていくことになった」^{*128}。

浅井氏によれば、道光27年、歐陽脩の誕生日を祝う酒宴で曾国藩が披露した詩文は、梅

曾亮が「雑事にかまけず古文に取り組む姿勢を賞賛」し、「歐陽脩の功績を明らかにすることで、文壇は正道に立ち戻った」と梅曾亮を評価していた^{*129}。ただ、曾国藩の京官時代の日記や手紙を読むかぎり梅曾亮の存在感は大きくなく、むしろ後年になってから梅曾亮を再評価しているように思われる。たとえば咸豊9年6月には毎日のように『梅伯言文集』を読んでいる。幕僚の趙烈文にも、はじめて都で官途に就いたころは梅曾亮にも「心中ひそかに負けていないと思っていた」が、「今日ふたたび梅伯言の文をめくってみれば、優れていると思うのだ」^{*130}などと語っている。

3、姻戚

曾国藩は筆まめだが、弟たちからの返信はあまりこない。道光22年には「弟たちに手紙を書くたびに、つい長くなってしまう。弟たちは読むのが面倒かもしれない。だが、弟たちが私にも長い手紙をくれたら、私は本当に嬉しく、至宝を得たように思う」^{*131}。口うるさい長兄は、弟たちには煙たかった。「四弟の手紙3枚、飾り気ない言葉で〔語語平実〕、人に対して思いやりにない私を責めているのは、まことにそのとおりである。毎月の書信はいたずらに空談で弟たちを責めるばかりで、良い事は書いていない。両親に兄の手紙を見せると、弟たちは平々凡々〔粗俗庸碌〕だと思われて、我々は立つ瀬がない、などと述べていた。この数語を読んで、兄は思わず汗が流れた」^{*132}と道光23年に書いている。道光24年には、「課程を立て、規定〔規条〕をたくさん述べて弟たちに守らせようとすると、弟たちは見飽きて〔習見〕、嫌になるだろう。黙っていても長兄としての戒飭〔督責〕の道ではないので、昔は弟たちにいつも課程を示してきた。近頃は有恒〔恒心をもつこと〕の二字を教えるのみである」^{*133}。それにしても、弟たちの手紙はいつも忙しいというが、「もし弟たちが忙しいというなら、兄の忙しさはほとんど10倍以上なのだから、一年中一字も家を書くことはできない」^{*134}と不満は残る。

京官は貧乏であった^{*135}。道光22年12月には「その席〔座〕で、人が心付け〔別敬〕をもらったときいて動揺する。昨夜、人が利を得た夢をみて、とても羨ましかった。目覚めてからはげしく自分を責めた。利を好む心が夢にまで現れる。なんとという卑しさか。洗いすすがなければと思うそばから、今日〔人が金をもらったと〕聞いてまた心が揺れる。本当に低俗〔下流〕である」^{*136}と自分を叱っているが、無理からぬものがあった。貧乏な翰林官は主考や学政になるか、外官に任命されるかして経済的に一息つくことができた。「袁漱六〔袁芳瑛〕は昨日また娘が生まれた。全部で4女、すでにそのうち2人が亡くなっている。兄を喪い、弟を喪い、また一差も得られない。ひどいものだ。貧乏翰林の耐えがたさよ」^{*137}と曾国藩は手紙で同情している。袁芳瑛、字は漱六、湖南省長沙府湘潭県人、道光25年の進士、庶吉士である^{*138}。同年の戴鸞翔^{*139}のような謎の友人もいた。彼は「3月に父が亡くなり、都に多年住み、家を買ひ、物を置き、費用も莫大、内外の差は一つも得られないのに、負債一つないと聞きます。どういう神通力なのでしょう」^{*140}。

陳源究は道光25年11月24日に江西省吉安府の知府に任命された。人も羨む幸運だったが、彼の本意ではなかった。「岱雲はまだ32歳で、翰林が太守〔知府〕になるのも、近來珍しいことです。人はみな彼を祝っていますが、彼は主考・学政を得られなかったことを深く恨んでいます。それに近頃の外官は掣肘されがちですから、上品高貴で安穩な京官のほうが良いです。たくさん地方の仕事〔外差〕を得られればもとより幸いです、得られなくても読書して名望を養うことができ、俗世間には染まりません。岱雲は郡〔府〕を得たのを榮譽としています、やはり玉堂〔翰林院の職〕を失うのを悔いています。任命後、1カ月あまり整理して、すでに12月28日に出京しました」*141。

道光23年5月、曾国藩は試差を受験して、6月に四川*142の郷試正考官に任命された。帰京したのは11月20日である*143。試験官を務めれば門生もでき、収入が得られる。曾国藩は故郷に送金することができたが、それが悶着のもとになった。曾国藩は帰京したとき南に戻る摺差〔地方官の上奏を届けた人員が、帰るついでに家信を届けた〕がなかったので12月中旬によく発信したのだが、弟たちが糊塗（馬鹿）と罵った。それに対して「どうしてここまで慎みがないのか〔何不検点至此〕」、「昨年5月末から12月初めまで、家信を一通も受け取っていない。私が四川で手紙を書いて都經由で家に送れたのに、家の手紙を都經由で四川に送れないことがあろうか。それをまた誰を糊塗と罵るのか。およそ文章を書くときは慎みがないといけない」*144と道光24年正月の手紙では腹を立てている。

道光24年3月10日の六弟と九弟あての手紙では、だいぶ気分が落ち着いている。昨年5月から12月までに合計7、8回手紙を出したとのことだが、帰京してから家人は2通しか見つけられなかった、5月22日発信のものと10月16日発信のものである。その他は見当たらない、遠くに出す手紙というものはこのように届き難いのだと言い、自分が帰京したとき、南に還る摺弁があったことは知らなかったと認めた。「12月の手紙に糊塗という字句があった。これも情の禁じ得ないところである。（中略）しかし兄たるもの、この二字をみて、その気持ちはわかっては責めずにはいられない。その気持ちを責めるのではなく、その字句の慎みのなさ〔不検点〕を責めるのである」と書いている。この件は「どうして二文字のことであれこれ言葉を費やす必要があろう、今後の手紙では絶対にこの話はしないでよい」*145と落ち着いた。

しかし、この3月10日の手紙は非常に長いものになった。曾国藩が12月18日の手紙に、家に送る銀1000両について、「600は家の借金返済に使って下さい。400は親族に贈って下さい」*146と書いたことを弟たちが非難したので、懸命に弁解しているのである。

送った銀のうち400両を親族や母方の親戚〔族戚〕に贈るように言った。そちらからの手紙に「考えが足りないのであれば、売名の心〔近名之心〕があるようです。」（中略）また言う、「貧乏な親戚は助けてやらなければならないというが、家の大人たちはきつとそんな太っ腹なことはしないとわかっているの、ちょっと言ってみただけだ。」（中略）兄は不肖といえど、どうしてそれほど卑しく奸悪だろうか。（中略）兄が己亥の年〔道

光19年]に外家〔母・江氏の実家〕に行ったら、おじ〔大舅〕が穴居し、野菜を植えて食べているのを見て長いあいだ心が痛んだ。通十舅*147は私を送るとき、「おまえ〔外甥〕が地方官になれば、おじさん〔阿舅〕は飯炊き〔焼火夫〕になりに行くよ」と言った。南五舅は長沙まで送ってくれて、手を握って言った、「来年、おまえの奥さん〔外甥婦〕を送って都に行くよ」、私が「京城での生活は苦しいですから、来ないでください」と言うと、おじは、「そうだ。だがそれでもわしはおまえの任所に行くよ」と言ってしのび泣いた。母かたのおじは皆年老いており、飢寒のさまは想像がつく。十舅は死んでしまって、もう助けることはできない。(中略) どうして称賛を得ようと売名的なことをし、己の気前の良いところ〔豪爽〕をみせて、祖父の吝嗇〔刻嗇〕を際立たせようとするだろうか。(中略) 弟たちは私より10年以上あとに生まれた。親戚〔戚族〕の家がみな貧乏で、わが家はまだ良いのを目にして、もともとこうだと思っただけで、最初はみなわが家と同様に盛んだったのを知らない。兄はその盛んな頃のさまを悉に見ているので、今日このように零落しているのは大変すまなく思う〔難為情〕。(中略) いまわが家はまさに全盛のとき、賢弟は区区数百金は非常に少ない、物の数に入らない〔不足比数〕としている。(中略) そちらからの手紙に「区区千金」の4字があった。天がわれら兄弟に厚いことを知らないのか。(中略) 兄はただ欠陥〔缺陷〕をもとめるのであり、住居を求缺齋と名づけた。(中略) 家の古い借金をすべて返すことができない、家の老人がたの衣服をたくさん作ることができない、諸弟のほしいものをすべて与えることができないのも欠陥を求めるということである。(中略) 家の負債を兄は実際すべて知っているわけではない。(中略) 兄が知っているのは江孝八外祖〔外祖は母方の祖父母〕の100両と朱嵐暄の50両だけである。(中略) 弟が言うように、家に千金あまり借金があることを兄が知っていれば、絶対に400両を人に贈りはしない。(中略) もし昨年得たのが雲貴や広西などの苦差〔実入りの少ない仕事〕だったら、家に送る金は一銭もなく、家族もまた私を責めることはできなかった*148。

その後も、曾国藩はこの件が気になって仕方がない。道光24年8月にも、「正月に、私は南に銀を送り、親族に贈ろうと思いました。本来は、目上の方々〔堂上〕が額〔数目〕を定めてこそ、『礼記』『内則』の『不敢私与〔勝手に与えない』』の道に合うものです。私はあのとき糊涂で、勝手にリストを作りました。軽重には妥当でないものが多いです。目上の方々〔堂上各大人〕が斟酌して増減して下さってはじめて宜しきを得ます*149。「天が破れば女媧が直す、洪水が大きくなれば禹王がなんとかする。家事は堂上大人がする、外のことは私がする*150」と別の手紙で書いているように、家事では長輩の権限を重んじたようである。翌年5月になっても、曾国潢に帳目を書いて都に送ってほしい*151と言っており、「去年、各所に贈った〔分贈〕金のこと、やっとはっきり分かりました*152」と曾国藩が書いたのは、道光25年7月のことであった。

曾国藩は道光29年11月に祖父の訃報に接した。曾国藩の選択肢は「休暇をとって帰省す

るか、家の老人がた〔堂上〕を迎養する〔都に迎える〕か〕であり、父母は「国藩に会いたいという気持ちと、国藩に休暇で帰ってほしくないという気持ち、どちらが緩でどちらが急だろうか」と弟たちに父母の気持ちをたずねている^{*153}。父は、彼が休暇をとって帰省するのを望まなかったので、「毎日父母の傍で事〔侍〕えたい」曾国藩は、「迎養」の計画をたてるしかない。そこで、家には「4人の老人がいる」が、「叔母の病気がまだ完全に良くなっていない」ので、「今年8月上旬に父、母、叔父の3人の老人を都に迎える。叔母は家に残し、弟たちの嫁が細心にお世話する。来年正月元宵節ののち、叔父を南に送り帰す」^{*154}と彼らしい細かいプランを立てている。翌年2月に曾国潢がつきそって父母が来京する、叔父は1、2年は来ない^{*155}と決まったが、「年譜」を見る限り、これは実現しなかったようである。この頃、道光29年12月11日に皇后が、道光30年1月14日に道光帝が亡くなっている。曾国藩は公務で忙しかったが、道光30年3月に上京した曾国潢が家事を担ってくれた^{*156}。

表2 曾国藩の子女と配偶者

続柄	名	出生	出生時の曾国藩の年齢	配偶者
長男	楨第	道光17年10月	27	無（道光19年1月夭折）
次男	紀沢	道光19年11月	29	湖南善化・賀長齡の娘。死別後、劉鑑（劉蓉の娘）と再婚。
長女	紀静	道光21年11月	31	湖南湘潭・袁秉楨（袁芳瑛の息子）
次女	紀曜	道光23年7月	33	湖南茶陵・陳遠濟（陳源究の息子）
三女	紀琛	道光24年8月	34	湖南湘郷・羅兆昇（羅沢南の息子）
四女	紀純	道光26年9月	36	湖南湘陰・郭剛基（郭嵩燾の息子）
三男	紀鴻	道光28年2月	38	郭筠（湖北蘄水・郭沛霖の娘）
五女		道光30年5月	40	無（夭折）
六女	紀芬	咸豊2年3月	42	湖南衡山・聶緝崇

（胡衛平『曾国藩文化世家』湖南人民出版社、2013年；趙世榮『曾国藩故園の才女』中華図書出版社、2010年；潘徳利・王宇『曾紀沢年譜』中国社会科学出版社、2011年；黎庶昌撰、李瀚章審定、梅季校点「曾国藩年譜」黎庶昌、王定安等編撰、李瀚章・李鴻章審訂『曾国藩年譜（附事略・栄哀録）』岳麓書社、2017年に拠る）

曾国藩には夭折した者も含めて、三男六女があった。彼らの縁組はほとんどが湖南省の同郷者とのあいだになされている。郭沛霖（道光18年の進士、庶吉士、曾国藩の「同年」）は湖北省だが、湖北省と湖南省は両広地方と呼ばれ、縁が深い。長女・曾紀静は袁芳瑛の子の袁秉楨（字は楡生）に嫁いだが、この結婚は不幸なものとなった。袁芳瑛は咸豊9年に早逝し、袁秉楨は苦勞知らずのお坊ちゃんに成り果てた。曾国藩は何度も袁秉楨を两江総督署に呼んで説教したが、悪習を改めなかったため、怒ってこの婿を追い出した。次女・曾紀曜は、

陳源究の息子・陳遠濟（字は松山）の妻となった。道光24年1月、陳源究の妻が都で病死したとき、息子の遠濟は生後やっと1カ月、曾国藩が自宅に連れ帰り、乳母を雇って養い育てたので、2人は幼なじみであった。紀曜はのちに夫についてイギリスに滞在する。三女・曾紀琛は「湘軍の母」羅沢南の息子・羅兆昇（字は允吉）と結婚した。はじめ夫婦仲が悪かったが、曾国藩は「忍」の字を書いてこれを戒め、羅兆昇を两江総督署に呼んで直接戒めた。羅婿はようやく読書をし、陝西省で官になったが、そこで病没した。四女・曾紀純は郭嵩燾の息子・郭剛基に嫁いだが、結婚後わずか3年で夫に先立たれ、紀純も35歳にもならず病没した。末娘の曾紀芬は「湘商」の衡山聶氏の聶緝榮に嫁した^{*157}。

長男・曾紀沢と賀長齡の娘との縁組には曲折があった。賀長齡（1785-1848）、字は耦耕・耦庚、号は西崖・雪霽、湖南省長沙府善化县人、嘉慶13年の進士、庶吉士である。道光25年に雲貴総督兼雲南巡撫となり、大理・永昌の回民の反乱を鎮圧したが、道光27年に回民がふたたび兵を挙げたため、弾劾され免職となった。『皇朝経世文編』の編纂者としても知られる^{*158}。「耦耕先生が免職となり、同郷でこれを嘆かないものはない。しかし彼は何度も手紙をくれ、絶対に私を咎めない。心を打たれ敬服する」^{*159}と曾国藩は言うが、道光27年には刑部にいたわけでもない。同じ湖南出身の京官として力になれなかったことを気にしているということだろうか。

各省の人士にとって、同郷の京官は重要な存在だった。「現在〔湖南省出身の〕京官は少なく、わずか22人です」^{*160}などと曾国藩も祖父母に書き送っている。地元からは様々な依頼がある。礼部侍郎の曾国藩は、王船山^{*161}の崇祠を設けたいと欧陽兆熊に頼まれ、「近頃の例では、地方大吏が奏請し、礼臣が審査のうえ許可〔核准〕するのであり、部から提案する〔発端〕するわけではありませんし、急いではなりません」^{*162}とやんわり断っている。北京時代に曾国藩は、長沙府会館や湖広会館の運営に関わり、同郷の面倒もよくみてやった。「同郷の危急のさい、多くが私に相談してきます。私は祖父大人のやり方をまね、金銭面ではできる範囲で助け、手伝い〔辦事〕には力を尽くします」^{*163}、「棺木の費用はみな私が面倒をみてやっており、金銭的に苦しいが、ほかに任せられる人がいなければ、客死して帰れないままにしておくことができようか」^{*164}などと書いている。

さて、曾紀沢の縁談は、賀家で家庭教師をしていた羅沢南がもってきた。羅沢南（1808-1856）、字は仲岳、号は羅山、湖南省長沙府湘乡县人、廩生、長い間、善化、湘郷などの地で教師をしていた。道光24年に曾国华と曾国荃が羅沢南のもとで学問したいと望んだ。咸豊元年以降は曾麟書とともに団練をおこない、曾家との往来が次第に増え、関係もますます密接になった。湘郷で訓練した郷勇を率いて太平軍と戦うことになる^{*165}。曾国藩は咸豊元年6月にはこの縁談を断るつもりだった。賀家の娘の「年は12、私は〔紀沢より〕1歳若いのがいやだし、耦庚先生は結局のところ長輩である。以前、左季高が陶文毅が婚姻したとき、私は世代が合わない〔原語は輩行不倫。左宗棠の娘と陶澍の息子が結婚したが、陶澍は左宗棠の長輩であったので、輩行に背いているという意味〕だと譏った。その轍をふみたくないで、謹んで辞退するつもりだ。（中略）郷にもし孝友書香〔孝友は父母に孝養を尽くし、

兄弟の仲が良いこと]の家があれば、貧富は問わず、縁組み[開親]してよい。澄弟に、私のために細かく物色してもらえないか。しかし私は同県の各家を思い浮かべてみても、本当の孝友の家を聞いたことがない」*166。

だが、すぐ気が変わった。8月には「耦耕先生の家との婚姻だが、まとめたいと思う。一つには耦翁が免官となったので、私も内心愧じるころがあった。これを機に一家となり、私の隠れた過ちをあがないたい。二つに、耦翁の家庭教育は以前から良く、惜しいことに[賢而]息子がないが、娘は賢いに違いない。(中略)以前、郷で婚姻相手を探してほしいと頼んだが、よく考えてみれば、我が県で、賀氏のような読書積徳の家も実際のところないのだ」*167。そうなる気になるのは本人の人柄であり、「耦庚先生の娘の徳容言功[婦人の四徳。すなわち婦徳・容貌・言葉遣い・針仕事]を、弟たちはちゃんときいてくれたか」*168と同年閏8月に訊ねている。

そこへ別の問題が持ち上がった。咸豊元年10月12日の家信に、

京師の女たち[女流之輩]が、およそ児女の婚約には嫡出庶出の分をもっとも重視[講求]するのである。家内は賀家との婚姻話をきくとすぐ、庶出かどうか訊いてきてくれと言った。私はそんな細かいことは訊けないと言って取り合わなかった。10日に、家から正月に婚約する[訂盟]との知らせがきた。11日、家内は自ら徐家*169に訊きに行き、賀の娘が確かに庶出であると知り、嫌だという。私は大義をさとし、どうして嫡出庶出を区別する必要があるろう、父上もすでに喜んで許しており、どうしてまた異議を出せようかといった。家内が言うには、夫になる者が妻が庶出なのを嫌がってれば[曾紀沢本人も気が進まなかったようである]、妻になる者は肩身が狭く、将来の曲折のことも考えておかなければならないという。(中略)家内の俗意が堅いので、12日夜に賀礼庚[賀家の人間であろう。道光28年には在京していたが、咸豊元年に湖南に戻ったようである]と陳伯符[賀氏の母の縁者か]の2人を家に呼んで実情を話し、伯符にまず手紙で賀家に、娘の庚帖[縁談のとき交換して合性をみる]は急いで送らなくて良い、また相談しようと言ってもらうことにした。(中略)いま父上が喜んで許しているのに、私は婦女の俗見に従って邪魔をし、非常に非礼である。ただ婚姻は100年の大事であり、まずしゅうとめと嫁、夫と妻が仲良くなければならないので、お心を煩わせ[上瀆]ざるをえない*170。

だが、曾国藩はまた思い直した。咸豊元年「12月11日に家書16号[この手紙は全集に収録されていない]を出した。そこに紀沢児の婚姻のことを書き、家ではすぐ賀家と婚約してほしいと述べた。(中略)以前に庶出をいやがった咎を悔いている云々と書いた。すでに受け取ったことと思う」*171。こうなると、曾国藩らしい心配がでてくる。「10月12日に出した手紙で、賀の娘が庶出なのを嫌うといったのは一時の誤謬であり、自ら過ちを悔いている。(中略)よく考えてみると、賀家の方々[簪纓門弟]は、前の話をきいて、娘が将来嫁にいっ

たらいじめられるのではないかとおそれて嫁に出したくないと思っているかもしれない。だとしたら、澄弟に省城に行ってもらい、羅羅山〔羅沢南〕と劉霞仙〔劉蓉〕の2君に、家内の性情を細かく賀家に伝えてくれるよう、よく頼んでほしい」*172。

劉蓉 (?-1873)、字は孟容、号は霞軒、湖南省長沙府湘鄉県人である。曾国藩と劉蓉がはじめて会ったのは道光14年である。道光17年、曾国藩は、ちょうど長沙で郷試を受験していた劉蓉と郭嵩燾に会い、3人で意気投合した。咸豊初年、劉蓉は羅沢南を補佐して団練をおこない、曾国藩の戎幕に従い、羅沢南の湘左營を率いることになる*173。曾紀沢と賀氏は咸豊6年3月21日に結婚したが、賀氏は翌年黄金堂で難産のため亡くなった。賀氏の母も黄金堂で亡くなった*174 ようなので、娘とともに曾家に来たのではないかと思われる。

曾国藩は、官界の「習気」(風習)のある家とは姻戚になりたくなかった。たとえば常大淳の家である。常大淳(1793-1852)、字は正夫、号は南陔・蘭陔、湖南省衡州府衡陽県人、道光3年の進士、庶吉士、道光24年当時は安徽按察使であった*175。

常家が私と婚姻を結びたいというが、私は望まない。それは、常のご子息〔世兄〕は父勢を恃んで権威をひけらかす〔作威福〕のが大好きで、衣服は華美〔鮮明〕、従僕は勢力をはり〔烜赫〕、その家の女子には役人の家の傲慢奢侈の習性〔習気〕があり、我が家の家法〔家規〕を乱し、我が子弟が放縦を好むようになってしまうからである。(中略)もしアヘンを吸うなら、絶対にだめである。(中略)いわゆる翰堂の秀才であり、父子いずれとも親しくすべきでない、私は会ったことがある*176。

4、公務

朱東安氏は、「10年7遷、連躍10級、これは当時めずらしいことであった」として、曾国藩の異例の速さの出世は、一つは曾国藩個人の能力と声望、もう一つは穆彰阿の推挙によるものだったと述べる*177。穆彰阿は曾国藩が合格した道光18年の会試の総裁である。穆彰阿(1782-1856)、郭佳氏、字は子樸、号は鶴航・常軒、鑲黄旗滿洲、嘉慶10年の進士、庶吉士である。内務府大臣、歩軍統領、兵部尚書、吏部尚書、文華殿大学士などを歴任した。道光帝に寵愛信任され、軍機大臣をつとめること20年あまり、弟子や昔の部下〔門生故吏〕は朝廷内外にあまねく広がり、「穆党」として知られた〔号称〕。「嘉慶以降、郷試を主宰〔典〕すること3回、会試を主宰すること5回」など試験〔衡文之役〕にあずからぬ年はなかった(『清史稿』)というから、その門生の多さは容易に想像できる。「アヘン禁止運動を妨害し、林則徐や鄧廷楨らを陥れ、琦善を懲慥してイギリスと講和させ、耆英がイギリス・アメリカ・フランスと不平等条約を結ぶのを支持した。咸豊帝が即位すると革職となり、永不叙用〔永久に復職させないという処分〕となった」*178。

道光23年のことだが、曾国藩は3月10日に「大考」(翰林院や詹事府の官員に対する試験)があるときいて狼狽した*179。試験後に「出場してから賦稿を同僚に見せて、はじめて大問

違いに一つ気付いたが、後の祭りである」*180。「長いこと賦を作っておらず、字も未熟です。従来、大考はおよそ6年に1度です。このたびは、(中略) わずか満4年であり、今回あるとは夢にも思いませんでした」*181と祖父母にも書き送っている。だが結果は意外にも良好で、「二等第一であった。(中略) 大間違があったにもかかわらず、かたじけなくも高等に列せられた」*182。この陰には穆彰阿の力があつたようである。朱東安氏によれば、「道光23年の大考翰詹は、穆彰阿が総考官であつた。交卷後、穆彰阿は曾国藩に試験のときの詩賦を持って来るように言い、曾はすぐに宿泊所に戻って清書し、自ら穆宅に届けた。この訪問が、曾国藩のその後のとんとん拍子の出世の起点となつたようである。これ以前、曾国藩の官位[秩品]はずっと動かなかつたが、この後は、ほとんど毎年昇進した」*183。

曾国藩は「御門」で抜擢された。9月24日に翰林院侍講学士になつたことを知らせる道光25年10月1日の手紙によると、「毎年御門は4、5回にすぎません。在京各官にポストが出ると、まだ任命されていないものは御門の日に特旨により任命[簡放]され、朝廷で官位を与えるには人々の前でこれをおこなう[爵人於朝与衆共之]*184]の意を示します。私は三度昇進しましたが、すべて御門のさいの特別な抜擢[特擢]です。天恩高厚、どう報いるべきかわかりません」*185。「御門聴政」とは皇帝が乾清門で群臣と会見し、政務を処理する制度である。清初の制度では皇帝は毎日乾清門で聴政することになっていた。康熙帝は基本的に毎日これをおこなつたが、雍正以後は軍機処が設立され、養心殿で政務が処理されるようになったので、不定期なものになった。皇帝が円明園に滞在しているときは、円明園の勤政殿で「御門聴政」がおこなわれた*186。『宣宗実録』には曾国藩が昇進したと思われる時の御門聴政が、「上御乾清門聴政」*187、「上(中略)御勤政殿聴政」*188、「上御勤政殿聴政」*189と記載されているが、曾国藩の名は出てこない。

曾国藩は道光27年6月に内閣学士兼礼部侍郎銜(銜は肩書き・待遇)となつた。「従四品からにわか二品、超越四級、特別な抜擢であり[遷擢不次]、深く恐縮しています[惶悚実深]」*190。弟たちにも、「湖南で37歳で二品に至つたものは、本朝ではまだ一人もない」し、「近来、進士になって10年で内閣学士[閣学]を得た」のは曾国藩自身を含めて3人だけである*191と誇らしげである。道光29年1月には礼部右侍郎になつた。同年に兵部右侍郎代理[署]、道光30年6月には工部左侍郎代理、9月には兵部左侍郎代理、咸豊元年5月には刑部左侍郎代理、咸豊2年1月には吏部左侍郎代理を兼ねた*192。

礼部右侍郎になり、曾国藩の日常は一変した。翰林院や詹事府とは異なり、部の堂官の仕事は多忙であつた。道光29年「1月22日に皇上の天恩を蒙り、礼部侍郎を昇授され、(中略)25日午刻に着任しました。部下[属員]は合計100人あまりです。(中略)以前は、内閣学士で部堂銜を兼ねた[道光27年に内閣学士兼礼部侍郎銜となつたことを指す]とはいえ、実際には部の仕事には全く関わりませんでした。いまは部の堂官ですので、仕事は比較的繁忙で、毎日役所に出て仕事しなければなりません。8日に一度円明園に上奏[奏事]に行きますが、これを該班といいます。急用があれば8日を待たずに陳奏しますが、これを加班といいます。役所の仕事のほか、私的なつきあい[応酬私事]もあり、近頃は非常に忙しく、

ほとんど一刻も閑がありません」*193。道光29年4月には、「隔日で役所に仕事に行き、それ以外は家にいて、みだりに外出しません。現在、役所の諸事をすでに熟知しています。司官たちはみな私に感服しており、上下意気投合し〔水乳交融〕、同僚とも非常に協調しています。私は終生礼部において、国家のために、この前例通りのことをして、真面目に〔不苟不懈〕条理整然と〔尽就条理〕仕事するのも、深く望むところです」*194。礼部時代の曾国藩は実に楽しそうである。同僚や部下と仲良くやっている様子は、後年の彼の幕府を思わせるものがある。

「堂官が常に役所に行くのは、譬えて言えば農夫が毎日、田んぼに行って農事を熟知するようなものです。いま各役所の堂官の多くは内廷行走〔軍機処勤務〕の人員で、何ヶ月も役所に来られないこともあり、常に司員と親しまず〔不相習〕、掌印・主稿の数人のほかは、大半は顔がわからないのです。(中略)それぞれの部に3、4人は内廷務めのない堂官が必要で、毎日役所に行かせ司員と相励ます」ことを曾国藩は上奏文のなかで願っている*195。ひととき忙しいのが刑部であった。「刑部にきて、毎日異常に忙しい。礼部・工部・兵部とは全然違う。もし長くこの部にいれば、もう本を読むことはできない」*196と咸豊元年6月に曾国藩は悲鳴を上げている。刑部侍郎代理の期限はだいたい咸豊元年10月だったが、後述のように琦善の一件の審議もあり*197、楽しい仕事ではなかったようである。

道光25年3月には会試同考官を得ることができた*198が、道光26年以降、地方での仕事〔外差〕を得ることはできなかった。道光26年の家信には「毎年300人あまりが考差〔公務を得るために試験を受けること〕して、公務を得られるのは合計で70人あまりにすぎません。ですから終身翰林で、何度も考差して得られなかった者も、ざらにいます」*199と書かれている。道光27年には、「丁、戊〔道光27、28年〕と2年考差しなければ、おそらく送る金はありませんが、私の都での生活はだいじょうぶですから、心配いりません」*200。道光29年には陳源究にあてて、「国藩は文差は一つも得られませんが、兵部の代理も兼ねています。(中略)一介の貧乏人〔貧窶〕が、突然六部に登り〔遽躋六曹〕、二つの職を兼ねています〔兼攝兩職〕、もしなお足るを知らず、失望〔舐望〕しては、鬼神の許すところではありません」*201と書いている。

受験しなかったのは、癩疾のためもあった。道光25年「夏に癩疾がおこり、秋になるとややおさまった。これ以降、癩疾は常におこり、老年にいたるまで全快することはなかった」のである*202。発疹の「色は白、親指くらいの大きさで、全身におよそ70-80個あります。鼻の両脇のものは盛り上がって〔成堆〕いませんが、他はみな盛り上がっています」*203。道光25年には「これまで世の病癩者に聞いたところ、完治することは稀で、おそらく一生の痼疾となるでしょう。(中略)癩の治療薬には痛くないものは一つもなく、体にはまともな皮膚〔完膚〕はありません」*204、道光26年には「癩疥がまだ治らず、頭や顔や首はまだら〔斑剥陸離〕なので、謁見〔陞見〕に都合が悪いので考差しないことを心から願う」*205と書いている。医者から癩疾は祖先の墓に不潔なところがあるから生じると言われたので、墓掃除を頼んだりもしている*206。

『曾国藩全集』には、京官時代の奏稿が15本^{*207}収録されている。そのうちの一つに「敬呈聖徳三端預防流弊疏（咸豊元年4月26日）」がある。「昨年の求言以来、どうして1、2の
 良い意見〔嘉謨至計〕がないことがありますでしょうか。その結果はというと、だいたいみな『無庸議〔議する必要はない〕』の3字で終わりです」と曾国藩は述べ、「三端、すなわち「瑣碎之風〔細かいことを重んじること〕」「文飾之風〔文飾を重んじること〕」「驕矜之氣〔傲慢であること〕」を戒めている^{*208}。咸豊帝は「上奏を見て激怒し、床に投げ捨て、すぐに軍機大臣を召して罰しようとした。祁公寯藻は叩頭して、主は聖、臣は直と述べた。さらに季公芝昌も、〔曾国藩の〕会試の房師であったが、彼のために、これは臣の門生であり、もともと愚直であります、皇上が幸いにもお赦しくされれば、いずれわかりましようと言った。そこで皇帝はお褒めの言葉を賜った〔優詔褒答〕^{*209}。当時、祁寯藻は体仁閣大学士、季芝昌は都察院左都御史、どちらも軍機大臣であった^{*210}。この上奏についての『文宗顯皇帝実録』の記述^{*211}は17行に及ぶ。それまで『清実録』に曾国藩の存在感がきわめて稀薄なことを考えると、この上奏の衝撃の大きさがわかる。

曾国藩はこの上奏について、家族や親戚に誇りたかった。弟たちに、次のように書き送っている。「私はまた一つ諫疏を出して、聖徳三端を述べ、流弊を防ごうとした。その言葉はあまりに激しかった〔激切〕が、皇上の度量は海の如しで、受け入れてくださった。（中略）上奏したとき、お怒りにふれる〔犯不測之威〕と恐れたが、得失禍福はすでに度外視した。思いがけなくも、お情け深く受け入れ、哀れみ、お助けくださった〔聖慈含容、曲賜矜全〕。これ以後、私はますます尽忠報国すべきで、もはや一身〔身家之私〕を顧みることはできない。しかし、今後、たくさん上奏しても、絶対にこの摺のような激烈率直〔激直〕なものは書かない。この摺は寛大にお許しいただいたが、以後の奏摺は聖怒にふれないとはかぎらない。（中略）このたび送る摺の控え〔摺底〕は、欧陽家、汪家^{*212}、諸親族には写して見てもらっていい。私は高位を忝くしているが、忠実正直にそれに報いようとしていること、阿諛迎合して、宗族をはずかしめ、期待に背くのをおそれていることをわかってもらえらるだろう^{*213}。

友人たちにも、ぜひ読んでほしかった。「敬呈聖徳三端預防流弊疏」を上奏した7日後に、羅沢南の手紙を受け取った。そのなかに「畏れるところあって敢言しないのは、人臣が位を貪る私心なり。その本に務めず、徒にその末を言うものは、後世苟且の学なり」という一節があったことについて、曾国藩は「拙疏と符節を合わせたようにぴったり合っており、万里を隔てながら意気投合しています。（中略）いま一通写しをお送りします。詳覽してご教示ください。山中の古い友人たち、劉孟容〔劉蓉〕、郭筠仙昆季〔郭嵩燾〕、江岷樵〔江忠源〕、彭筱房〔彭洋中〕、朱堯階〔朱冀〕、欧〔陽〕曉岑諸君には、送って見せていただいてかまいません。国藩は高位を忝くしながら阿諛追従して、古い友人の期待に背くことはいたしません。この上奏がその発端です^{*214}と述べている。

上の友人たちについて、簡単に紹介しておきたい。江忠源（1812-1853）、字は常孺、号は岷樵、湖南省宝慶府新寧県人、道光17年に湖南郷試で挙人となる。任侠の人であった。道光24年、会試を受けるために訪れていた北京で、郭嵩燾を通じて曾国藩に会わせてもらっ

た。二人は楽しく世間話をしていたが、江忠源が帰るとき、曾国藩はこれを目で追い、振り返って郭嵩燾に「京師ではこのような人材は得られない」、「この人は必ずや天下に功名を立てるが、節義によって死ぬだろう」と言った*²¹⁵。彭洋中（1803-1864）、字は暁杭、号は彦深、湖南省長沙府湘鄉県人、邵陽訓導、雲南定遠知県、四川潼川知府などをつとめ、のちに軍で没する*²¹⁶。朱莫、字は堯階、湖南省長沙府湘鄉県人、若いとき曾国藩と共に学んだ*²¹⁷。曾国潢が婚姻を結ぶとき、「澄弟が朱堯階と縁組みをするのは、とても嬉しい。私の最初の友人づきあいとしては、堯階に過ぎるものはない」*²¹⁸と曾国藩は喜んでいる。朱東安氏はこうした交友関係を重視し、「これらの支持者の絶大多数は、のちにみな曾国藩集団の骨幹成員となる」として、この上奏は「曾国藩集団が前期に集団でおこなった最初の政治行動であった」*²¹⁹と解釈している。

5、帰郷

道光27年の家信によれば、「昨年祖母の訃報〔祖母・王氏は道光26年に死去〕に接してから、日々南に帰りたいたいと思っている」が、「3つの困難」があった。第一は金銭問題である。都に500両あまりの買い掛け代金〔欠帳〕があり、これを返す金がない。往復〔来往〕の旅費も400両かかり、工面するのが難しい。第二は家族である。家族を連れずに帰ると、もし家で何かあって、すぐに京師に帰れなくなったときに二カ所の心配をすることになる〔兩頭牽扯〕。家族を連れて帰れば、旅費がさらに嵩むし、住む家がなくなる。第三に、単身で帰れば身軽で半年たたずに帰京できるが、辞職〔開缺〕後、翌年はおそらく補缺されることはできず、都で何もせず1年暮らさなければならない*²²⁰。

道光28年になっても、「一つは京城での買い掛け代金〔欠帳〕が一千〔両〕近い。家に帰るとなれば旅費やつきあい〔接礼〕でまた数百〔両〕かかり、工面ははなはだ難しい。二つに、二品官が帰籍するとなれば、自分で上奏文を書かなければならないが、どう書けば良いか難しい」と困難を挙げる。できれば学政の職を得て、「3年の任期が終わったら帰省するのが最善である。それが無理なら、来年、地方の省の主考を得られれば旅費ができるから、その翌年に帰る。それが次善である」。それも駄目なら、弟たちに期待するしかない。「六弟と九弟のうち1人が来年〔科挙に〕受かって、明後年に京官になって家〔門面〕を支えてくれれば、私は帰宅して親の世話をして〔帰家告養〕、他日また去就を決める。この三つすべて無理なら、6年後、つまり母上が70になる甲寅の年〔咸豊4年〕に親の世話をするために帰郷すると上奏することを誓う。負債が万にのほり〔累万〕蓄えがなくても、断じて顧みない」*²²¹。

道光29年になると、帰心矢の如しといった様子である。「いまは宦海のなかにいるが、いつも上陸方法を考えている〔時作上岸之計〕」*²²²。この年の「考差では、江西省の主考になりたかった。家族〔家中親属〕を江西に呼んで、楽しく一家団欒することができる」と夢見ていたが、6月13日に「田敬堂〔田雨公、道光18年の進士、庶吉士〕が江西の試差を得た。

私の願いはかなわなかった」*²²³。10月の手紙によると、「煩わしく卑俗で〔繁俗〕で、天下国家〔国計民政〕に益するところがない」官場に嫌気がさし、「すでに来年8月に休暇を願って帰省し、明後年2月に都にもどることに決めた。(中略)今年、父は60の大寿である。(中略)我が郷の、逢一〔たとえば61歳〕を重んじ、晋十〔たとえば60歳〕を重んじないしきたりと合う」*²²⁴。それにつけても、弟たちに京官になって自分を支えてほしい。咸豊元年9月、湘郷県から一人も湖南郷試に合格しなかったとして、「兄は近年、仕事は日に日に多く、元気は日に日に消耗している。つねに、弟たちが後に続き、長く京城に住んで、私に一臂の力を貸してくれることを望んでいる。弟たちにこの重任を分かちもってもらい、私もほんの少し肩を休めたい。一人も受からなければあてがつかない」*²²⁵と書き送っている。

この時期、曾国藩は愉快ではなかった。咸豊元年閏8月12日の手紙を見ると、「刑部〔左侍郎〕の代理はだいたい10月までだが、現在、琦善の一件を審理〔審辦〕しており、まさに緊迫〔喫緊〕の時」*²²⁶であった。道光29年に陝甘総督となり、青海辦事大臣代理を兼任していた琦善は、雍沙番と黒城撤拉の回匪を討伐したが、妄りに人を殺したと諫官〔言官〕に弾劾された。都統・薩迎阿*²²⁷が現地に派遣され、琦善は免職のうえ逮捕され罪に問われる〔革職逮問〕ことになった。琦善は北京で刑部に引き渡され、軍機大臣と三法司が合同審判にあたった。琦善は自ら千言あまりの供述を書き、薩迎阿に陥れられたと述べた。朝廷の諸公も琦善の肩をもった。軍機章京・邵懿辰は琦善の供述について詰問したが、諸公はそれを省みなかった。薩迎阿は琦善の任を代行して都にいなかったので、薩迎阿に随行した司員4人を法廷で琦善と対訊させよ、反坐（偽証や誣告で人を罪に陥れた者がその罪と同程度の刑を受けること）させよという者までいた。司員になんの咎があらうか、と曾国藩は一人反対した。力説し、語気も厳しかったので、みな恐れて、この意見はそれきりになった*²²⁸。「公は直言して諫めること〔直諫〕や議論すること〔議事〕を好み、しばしば諸公・貴人と仲違いた〔不和〕。諸公・貴人は彼を見ると、あるいはこれを避け、同席しないことすらあった。公もそれを無視していた」*²²⁹。

咸豊2年6月12日、曾国藩はようやく念願の江西正考官に任命された*²³⁰。翌日、任務後の休暇を願い出た。「臣は道光19年に上京して奉職してから14年、休暇で帰省し父母を見舞うことができず、迎養もできていません。近頃、粵匪〔太平軍〕が湖南に侵入〔竄入〕いたしました。近くの衡陽では団練をし、各郷が警戒し恐れています。(中略)いま幸いに天恩を被り、江西に遣わされることになりました。江西の袁州から臣の家まで、8日の道のりに過ぎません。(中略)皇上の天恩で20日の休暇をお与えくださり、9月に合格発表したあと帰省させていただければ、家族一同、このうえない皇恩を被ります。もしお許しをいただければ、臣は長沙から湖北経由で帰京いたします」*²³¹。

だが、ぬか喜びとなってしまった。江西に向かう途中の7月25日、母が物故したとの知らせを受けた。その夜のうちに、北京にいる息子の紀沢に長い手紙を書いた。「7月25日丑正二刻、安徽太湖県の小池駅に着いたとき、母の逝去を聞かされた〔慘聞〕。(中略)家を出て14年、もはや母の声と姿に接することができないのはこの上ない悲しみ〔痛極痛極〕であっ

たが、都に残してきた家族に今後の指示をしなければならない。家族を湖南に帰らせるつもりだった。

都を出るとき、家の事一切を毛寄雲年伯〔毛鴻賓〕^{*232}にじかに頼んである。(中略) 現在、都の家には銀銭がなく、全然出せないのので、弔問を受け付けて〔開吊〕香典を集め、家族が南に戻る旅費にするしかない。開吊で得られるのは、300両ほどにすぎないだろう。人数が多いので旅費は400-500両はかかる。足りない分は、寄雲年伯に工面してもらおうように。このほか、同郷の黎樾喬〔黎吉雲〕^{*233}、黄恕皆老伯〔黄倬〕^{*234}、同年の王静庵〔王溥〕^{*235}、袁午橋年伯〔袁甲三〕^{*236}はふだんから義をもって助けてくれる人たち〔肝胆〕であり、私に良くしてくれるので、旅費を工面〔湊辦〕してもらえるかもしれない。人から恩情を受けたら将来恩返しをしなければならないので、多くを求めてはいけぬ。袁湫六姻伯〔袁芳瑛〕のところは苦しいから、いろいろ力を貸してもらおう〔出力幫辦一切〕だけで銀銭は頼んではいけない。

この手紙はさらに続き、都に残してきた買い掛け代金〔欠帳〕、帰路、家具や書籍のことなど17条に及ぶ^{*237}。

7月27日には、紀沢にさらに3条、追伸を送った。車や家畜のこと、新しい本箱のこと、『会典』の版木を礼部に返却することである。さらに、「六部九卿漢堂官はみなよく知っているのので、全員に訃報を知らせてもよい。満堂官は、行き来のある者だけにしなければならない」^{*238}と注意している。

第三の手紙の日付は8月8日だが、書き終えたのは8月12日夜のようである。人に貸している1000両近い金のことなどにふれたあと、8月8日以降の自分の行動を知らせている。

8日に船中で家信を書いた。11日朝になって、やっと黄州に着いた。(中略) 12日未刻、湖北省城に到着した。常南陔先生〔常大淳〕のご子息に会ってはじめて湖南の消息を知った。長沙は包圍され危険が急迫しており、道路はふさがれ、旅客は通れないという。悲痛に堪えず、非常に焦っている〔焦灼之至〕。現在私は武昌にちょっと留まっている。家族はいまは絶対に出京してはならない。来年春になってからのことにしよう。弔問を受け付けた〔開吊〕あとは小さな家に引っ越して住むように。なんとかして銀を都に送りつづける。(中略) 十二日夜、武昌城内にて^{*239}

常大淳は、咸豊2年12月26日、太平軍が武昌を陥としたとき、井戸に身を投げて死んだ。咸豊2年8月に湖北巡撫から山西巡撫に異動になっていたのだが、山西に着任することなく、湖北省城で亡くなったのである^{*240}。

曾國藩は8月13日は「湖北省城にいた。いろいろと考えたが、帰宅して父に会うしかない。(中略) もし賊に遇ったら湖北省城に引き返す」^{*241}、「8月14日に湖北を発ち、18日に

岳州に着き、回り道して湘陰・寧郷経由で23日に家についた。腰里の新屋〔新腰里の黄金堂*²⁴²〕で母を痛哭した。(中略) 家族は都にいるように。しばらくは出京する必要はない。長沙が落ち着いたら、また手紙を出す*²⁴³。9月18日の手紙で、7月28日までに出した3通の手紙では急ぎ都を出るように書いたが、8月13日以降の3通は長沙が包囲されたので都を出ないように書いた、すべて受け取ったかどうかと書き、

地方団練については、我が曾家はみな武芸を習い、他姓にもよくするものが多い。土匪は決しておそれることはない。粵匪〔太平軍〕の情況は悪いが、ここは山間の僻地にある。要路にないので、決して蹂躪されることはない。(中略) 私は家では一人の下男も連れていない。郷にいるときは、郷の昔の様子をすべて守り、少しも役人くささ〔官宦気習〕をもたない。(中略) 長沙はしばしば戦勝、近日中に包囲が解けると思う。おまえたちが家に帰る日も近い*²⁴⁴。

咸豊2年12月15日に曾国藩が欧陽秉銓あてに書いた手紙は、多くの内容を含んでいる。欧陽秉銓は欧陽夫人の兄で、咸豊2年3月から北京に滞在していた*²⁴⁵。「体調はとてもよく、顔は血色が良くふっくらしています。在京10年あまり、このようなことはありませんでした」と、曾国藩は北京にいたときより元気だった。

12月13日申刻、湖南巡撫がわざわざ人を派遣して、咨文〔同級官庁や隷属関係のない官庁のあいだでやりとりされる公文〕を届けてきました。11月29日に皇帝の命令を受けました。湖南省で郷民の団練、土匪捜査などの仕事に協力する〔幫同辦理〕よう命じています*²⁴⁶。私は訃報をきいて家に帰り、やっと満4カ月です。母のことは、とりあえず仮埋葬し〔草草権厝〕、土地を探して改葬するつもりです。家中の諸事はまだ片付いておらず、いますぐ出て役所の仕事をすれば、不孝の罪が大きくなります。

上のように、まだ命令を受けるつもりはないと述べる。だが「不孝」以外にも、気の進まない理由はあった。

真剣に監督・処理〔督辦〕するとなれば、各県をくまなく回り、名士・長老〔紳耆〕に呼びかけ、寄付〔捐資集事〕を勧めなければなりません。おそらく益はわずか10の2、害〔擾累〕が10の8です。真剣にやらなければ省城で坐食して、軍需局の給与〔供応〕を一つ増やすだけ、官員のつきあい〔応酬〕を一つ増やすだけです。再三再四考え、実際、国事に裨益するところがないので、具摺陳情し、3年の服喪を全うすることを懇請します。

家族のことは、そちらで決めてくれという。

皇帝の命を受けてはじめて、漢陽の陥落を知りました。田舎では音信が通じづらく、県城にも確かな情報がありません。都にいる家族が帰るか否か、兄上と妻で決めて下さい。浙江・江西経由、あるいは樊城経由、あるいは〔北京に〕長く住むことにして家には帰らないことにする、すべて兄上がお決め下さい。私は辺鄙な田舎におり、情報はわからず、遠くから決定することはしません*²⁴⁷。

おわりに

梁啓超は、曾国藩の名言集の序で彼に賛辞をささげているが、それは次のような文で始まる。「曾文正〔曾国藩〕は、近代のみならず、有史以来ほとんど例を見ない有徳者〔大人〕である。わが国のみならず、全世界でもまれな有徳者である。しかしながら、文正にはもとより飛び抜けた天才があったわけではない。同時期の英傑〔賢傑〕たちのなかで、最も鈍拙と言われ、時運においても、生涯、逆境のなかにあった」*²⁴⁸。本稿でも検討したように、曾国藩は完全無欠の人ではなかった。だが自分の欠点を反省し、日々試行錯誤を重ねながら、生活や仕事に生じる大小様々の問題に真剣に取り組んだ。

湖南省湘郷県の農村に生まれた曾国藩は、一族で最初の進士となって翰林院入りし、異例ともいえる速さで二品の京官となった。礼部右侍郎であったとき、ほかに4つの部の侍郎を代行した。彼の抜擢のかげには道光帝の寵臣・穆彰阿の存在があった。穆彰阿は曾国藩が合格した道光18年の会試の総裁である。理学に志した曾国藩であったが、やがて桐城派の古文に傾倒していく。ともに学問と修身に励んだ友人たちは、後年、彼の支えとなる。もっとも親しかったのは「同郷」と「同年」であり、子女の婚姻を通じて姻戚となった者もいる。曾国藩の脳裏には常に故郷の家族や親族の姿があり、さまざまに配慮し援助している。理想とかけ離れた官場への失望が深まり、休暇をとって帰省したいとの思いが強まった。郷試試験官として江西省に向かった曾国藩は、その途上で母の死を知り、そのまま帰郷して喪に服した。

曾国藩は、上は皇帝から、下は貧しい農民の様子まで、つぶさに知っている人であった。名門の子弟とは違い、稀にみる見聞の広さであったといえることができる。また、京官時代の曾国藩からは、京官が地方と北京を結ぶ重要なチャネルであったことがわかる。京官はもちろん現代のような選挙による地方代表などではなかったが、地方の人士にとって同郷の京官は大切な存在だった。北京から派遣される地方官と地元民のあいだでは、利害が一致するとは限らない。一方、地元出身の京官は手紙のやりとりなどを通じて、地元民たちの要望を知り、それを都の政治に反映するうえで一定の役割を果たすことができた。京官たちへの手紙などを通して、地方の実情についての情報が北京に伝えられたことも見逃してはならない点である。

- *1 朱東安『曾国藩伝』百花文芸出版社、2000年、7-8頁。以下、朱東安『曾国藩伝』と略記する。黎庶昌撰、李瀚章審定、梅季校点「曾国藩年譜」黎庶昌、王定安等撰、李瀚章・李鴻章審訂『曾国藩年譜（附事略・栄哀録）』岳麓書社、2017年、卷一、3頁。以下、黎庶昌「曾国藩年譜」と略記する。曾国藩はもともと山東の曾參の子孫と共同の宗譜はなかったが、これと連宗したのである（朱東安『曾国藩伝』284頁）。
- *2 胡林翼（1812-1861）、字は旻生、号は潤芝、湖南省長沙府益陽県人、道光16年の進士、庶吉士、貴州省で鎮遠知府、貴東道などをつとめたあと、四川按察使、湖北布政使、湖北巡撫などをつとめ、曾国藩を支持して太平軍と戦い、咸豊11年に病死する（喬曉軍編『清代翰林伝略』陝西旅游出版社、2002年、305頁）。以下、『清代翰林伝略』と略記する。孫文良・董守義主編『清史稿辞典』山東教育出版社、2008年、1238頁。以下、『清史稿辞典』と略記する。
- *3 左宗棠（1812-1885）、字は季高・樸存、湖南省長沙府湘陰県人、道光12年の挙人、曾国藩に推挙されて太平軍と戦い、浙江巡撫、閩浙総督、陝甘総督などを経て光緒7年に軍機大臣となり、のちに两江総督をつとめる（趙爾巽等撰『清史稿』中華書局、2003年、12023頁。以下、『清史稿』と略記する。『清史稿辞典』407頁）。
- *4 劉長佑（1818-1887）、字は子黙、号は印渠、湖南省宝慶府新寧県人、咸豊初年に湖南〔湘〕で団練をおこない、1860年に広西巡撫、翌年両広総督から直隸総督になるが、兵敗れて免職となる。1871年にふたたび広西巡撫、雲貴総督となる（『曾国藩全集』書信（一）岳麓書社、1995年、113頁、注1）。以下、『曾国藩全集』について「岳麓書社、1995年」は省略する。
- *5 朱東安『曾国藩伝』4-6頁。
- *6 胡衛平『曾国藩文化世家』湖南人民出版社、2013年、52、69-70頁。以下、『曾国藩文化世家』と略記する。
- *7 朱東安『曾国藩伝』7頁。「初めの名は子城、字は居武、姓名と字を合わせると、ちょうど『曾子居武城』になった。役人になった後、その師の某氏が、鄙俗なのを嫌った〔病〕ので改めた」（『曾胡家世科第』徐凌霄・徐一士著、徐沢昱・徐禾整理『凌霄漢閣談薈 曾胡談薈』中華書局、2018年、357頁）。
- *8 朱東安『曾国藩伝』8-10頁。黎庶昌「曾国藩年譜」卷一、5-6頁。
- *9 朱東安『曾国藩伝』7-8頁。黎庶昌「曾国藩年譜」卷一、8頁。一番下の妹は、曾国藩の長男・楨第とともに、種痘の失敗で命を落とし同穴に埋葬された。妹は8歳171日、楨第は1歳4カ月、「満妹と息子は生前片時も離れず、二人とも急に悪化して〔逆症〕夭折した、悲しいことだ」（『曾国藩全集』日記（一）道光19年正月23日-2月1日、4-6頁）。こんな惨事のあとでも「孫、孫娘はみな元気です。3月に牛痘をする予定です。こちらの牛痘局は広東の京官が名医を頼んで局を設けて善行を積んでいるもので、一銭もとらず、万に一つの失敗もありません。」（『稟父母』道光22年3月11日、『曾国藩全集』家書（一）23頁）と後年も種痘はしてもらっている。
- *10 後年、曾国藩は息子の紀沢への手紙に「郷では本がないのに苦しんだが、おまえは今日に生まれた。我が家の本はすでに、道光中頃〔中年〕の100倍である」と書いている（『論紀沢』咸豊9年4月21日、『曾国藩全集』家書（一）476頁）。
- *11 黎庶昌撰「曾国藩年譜」卷一、4-8頁。朱東安『曾国藩伝』12-13頁。
- *12 前掲「曾胡家世科第」358頁。
- *13 朱東安『曾国藩伝』14頁。
- *14 官は雲貴総督に至る。『清代翰林伝略』292頁。
- *15 黎庶昌撰「曾国藩年譜」卷一、7頁。「引見新科進士、特旨（中略）曾国藩（中略）著改為翰林院庶吉士」

(『宣宗成皇帝実録(5)』(『清実録』37) 卷三〇九、道光18年閏4月甲戌條、中華書局、1986年、807頁。
以下、『清実録』について「中華書局、1986年」は省略する。

- *16 黎庶昌撰「曾国藩年譜」卷一、7頁。
- *17 趙烈文『能静居日記』岳麓書社、2013年、同治6年9月10日、1107頁。
- *18 朱東安『曾国藩伝』11頁。
- *19 諸橋轍次『大漢和辞典』(大修館書店)は、「把戲」を「力業をし、又は刀をつかひ猿を舞はす芸を演ずる者。大道芸人。又、やりくりの意」と説明している。
- *20 張宏傑『給曾国藩算帳—一個清代高官的取与支(京官時期)』中華書局、2015年、16、25、33頁。
同書では「把戲」は「玩耍〔ふざける〕之意」と説明されている(16頁)。
- *21 「致澄弟沅弟季弟」道光27年6月27日、『曾国藩全集』家書(一)151頁。
- *22 黎庶昌撰「曾国藩年譜」卷一、8頁。「引見戊戌科散館及補行散館人員、特旨(中略)三甲庶吉士(中略)曾国藩(中略)著授為檢討」(『宣宗成皇帝実録(6)』(『清実録』38) 卷三三三、道光20年4月壬午條、61頁)。
- *23 『曾国藩全集』日記(一)道光20年11月19日、46頁。『曾国藩全集』書信(一)73頁、注1。朱東安『曾国藩伝』37-38頁。
- *24 その後、直隸按察使、山東布政使、大理寺卿、刑部侍郎などをつとめ、同治5年に病で乞休した(『清史稿辞典』797頁)。『曾国藩全集』日記(一)道光20年7月至9月、46頁。
- *25 『曾国藩全集』日記(一)道光20年11月19日、50頁。
- *26 『曾国藩全集』日記(一)道光20年11月22日-12月10日、51-54頁。
- *27 『曾国藩全集』日記(一)道光20年12月13日、54頁。後日また縁起をかついで転居している。「棉花六条胡同の家は、王翰城が冬は非常に不吉だといひ、祖父母と父母がそろって健在〔重慶〕の者は、三面が懸空の家に住むべきでないといひ、繩匠胡同の家に引越すことにしました」(「稟父」道光21年8月3日、『曾国藩全集』家書(一)10頁)。
- *28 黎庶昌撰「曾国藩年譜」卷一、8頁。
- *29 『曾国藩全集』日記(一)道光21年3月1日、68頁。
- *30 尹鈞科主編、吳承忠著『北京城市史 明清休閒地理』北京出版社、2016年、365頁。
- *31 『曾国藩全集』日記(一)道光21年閏3月6-7日、75頁；道光21年閏3月13日、76頁。
- *32 『曾国藩全集』日記(一)道光21年閏3月14日、76頁。「父上が都を出てから一路順調、京から省までわずか30日あまり、まことに神速です」(「稟父」道光21年5月18日、『曾国藩全集』家書(一)5頁)。
- *33 「稟父母」道光21年9月15日、『曾国藩全集』家書(一)14頁。
- *34 黎庶昌撰「曾国藩年譜」卷一、9頁。
- *35 「稟祖父母」道光22年8月1日、『曾国藩全集』家書(一)30頁。
- *36 黎庶昌撰「曾国藩年譜」卷一、13頁。
- *37 「稟父母」道光23年2月19日、『曾国藩全集』家書(一)58-59頁。
- *38 「致澄弟沅弟季弟」道光25年2月1日、『曾国藩全集』家書(一)105頁。
- *39 黎庶昌撰「曾国藩年譜」卷一、11頁。「稟叔父母」道光25年10月1日、『曾国藩全集』家書(一)123頁。
- *40 「致澄弟沅弟季弟」道光24年11月21日、『曾国藩全集』家書(一)99頁。
- *41 「稟父母」道光26年10月15日、『曾国藩全集』家書(一)137頁。
- *42 黎庶昌撰「曾国藩年譜」卷一、12頁。「澄弟は都を出て、70日あまりもたってやっと着いた」(「致澄弟沅弟季弟」道光27年3月10日、『曾国藩全集』家書(一)146頁)と、この帰郷にはずいぶん日数がかかったらしい。

- * 43 「致澄弟沅弟季弟」道光28年5月10日、『曾国藩全集』家書（一）168-169頁。
- * 44 黎庶昌撰「曾国藩年譜」卷一、12頁。「稟父母」道光26年9月19日、『曾国藩全集』家書（一）135-136頁。
- * 45 「致澄弟沅弟季弟」道光28年正月21日、『曾国藩全集』家書（一）163-164頁。
- * 46 「稟叔父母」道光28年7月20日、『曾国藩全集』家書（一）171頁。
- * 47 「祖父はまた昨冬発病し、右手右足が動きません」（「致陳源充」道光28年、『曾国藩全集』書信（一）54頁）。
- * 48 黎庶昌撰「曾国藩年譜」卷一、14、17頁。
- * 49 「致澄弟温弟沅弟季弟」咸豐元年9月5日、『曾国藩全集』家書（一）223頁。
- * 50 「稟父母」道光25年5月29日、『曾国藩全集』家書（一）114頁。
- * 51 「稟叔父母」道光25年10月1日、『曾国藩全集』家書（一）123頁。
- * 52 朱孫貽（?-1866）、字は石翹・石樵、江西省臨江府清江縣人。寧郷、長沙、湘郷を代理し、咸豐初年、功により宝慶知府に抜擢、1860年、按察使銜を加えられる。1862年、浙江塩運使、のちに病で帰郷した（『曾国藩全集』書信（一）126頁、注1）。団練を積極的に支持した（朱東安『曾国藩伝』53-54頁）。
- * 53 朱金甫・張書才主編、李国栄副主編『清代典章制度辞典』中国人民大学出版社、2011年、382頁。
- * 54 「致澄弟温弟沅弟季弟」咸豐元年7月8日、『曾国藩全集』家書（一）216頁。
- * 55 「致澄弟温弟沅弟季弟」咸豐元年8月19日二更、『曾国藩全集』家書（一）219-220頁。
- * 56 袁黄、字は坤儀、号は了凡、浙江嘉善県（嘉興県）の人、明末の思想家。「従前種種、譬如昨日死；従後種種、譬如今日生」は『了凡四訓』の「第一篇 立命之学」中の言葉（尚栄・徐敏・趙鋭訳注『了凡四訓』中華書局、2022年、37頁）である。
- * 57 『曾国藩全集』日記（一）道光20年正月至6月、42頁。
- * 58 「致澄弟温弟沅弟季弟」道光29年3月21日、『曾国藩全集』家書（一）183頁。
- * 59 「稟父母」道光25年7月16日、『曾国藩全集』家書（一）117頁。
- * 60 前掲『能静居日記』同治9年10月21日、1369頁。
- * 61 朱東安『曾国藩伝』16-23頁。
- * 62 『清代翰林伝略』248-249頁。
- * 63 『清史稿辞典』1907頁。
- * 64 『清史稿辞典』1432頁。
- * 65 「稟祖父」道光21年4月17日、『曾国藩全集』家書（一）3頁。
- * 66 「稟祖父母」道光22年4月27日、『曾国藩全集』家書（一）24頁。
- * 67 「稟祖父母」道光22年9月17日、『曾国藩全集』家書（一）33頁。
- * 68 『曾国藩全集』日記（一）道光21年7月14日、92頁。朱東安『曾国藩伝』25-26頁。
- * 69 『清代翰林伝略』287頁。
- * 70 朱東安『曾国藩伝』26頁。
- * 71 『曾国藩全集』日記（一）道光21年9月1日、100頁。
- * 72 『曾国藩全集』日記（一）道光22年10月21日、121頁。
- * 73 「致澄弟温弟沅弟季弟」道光22年12月20日、『曾国藩全集』家書（一）46頁。
- * 74 「澄弟が禁煙したのはちょうど兄と同じ年齢である。私が壬寅の年〔道光22年〕に禁煙したのは32歳のとき、澄弟も去年32歳であった」（「致澄弟温弟沅弟季弟」咸豐2年正月9日、『曾国藩全集』家書（一）230頁）。
- * 75 『曾国藩全集』日記（一）道光23年4月23日、198頁。

- *76 『曾国藩全集』日記（一）道光23年4月24日、198頁。
- *77 李鴻章の「同年」である。『清代翰林伝略』333頁。
- *78 『曾国藩全集』日記（一）道光24年5月5日、200頁。
- *79 『曾国藩全集』日記（一）道光22年10月8日、115頁。
- *80 『曾国藩全集』日記（一）道光22年11月10日、127頁。
- *81 『清代翰林伝略』309頁。江西省広信知府、安徽省池州知府を歴任、咸豊3年12月、廬州が太平軍に破られたとき、自縊して亡くなる。
- *82 『曾国藩全集』日記（一）道光22年10月3日、113-114頁。
- *83 『曾国藩全集』日記（一）道光22年10月12日、117頁。
- *84 『曾国藩全集』日記（一）道光22年10月25日、122頁。
- *85 『曾国藩全集』日記（一）道光22年10月27日、123頁。
- *86 『曾国藩全集』日記（一）道光22年10月29日、124頁。
- *87 『曾国藩全集』日記（一）道光22年11月13日、128頁。
- *88 『曾国藩全集』書信（一）40頁、注1。黎庶昌「曾国藩年譜」11頁。朱東安『曾国藩伝』335頁。『曾国藩全集』日記（一）道光24年正月16日、186頁。
- *89 『曾国藩全集』日記（一）道光22年11月14日、129頁。
- *90 「致澄弟温弟沅弟季弟」道光22年12月20日、『曾国藩全集』家書（一）46頁。
- *91 『曾国藩全集』日記（一）道光22年11月23日、133頁。
- *92 『曾国藩全集』日記（一）道光22年12月21日、142頁。
- *93 『曾国藩全集』日記（一）道光23年3月1日、162頁。
- *94 『曾国藩全集』日記（一）道光23年正月7日、150頁。
- *95 『曾国藩全集』日記（一）道光23年正月30日、188頁。
- *96 『曾国藩全集』日記（一）道光24年5月1日、199頁。
- *97 『曾国藩全集』日記（一）道光24年5月2日、199頁。
- *98 『曾国藩全集』日記（一）道光22年10月9日、116頁。
- *99 『曾国藩全集』日記（一）道光22年10月14日、118頁。
- *100 『曾国藩全集』日記（一）道光22年12月26日、144頁。
- *101 『曾国藩全集』日記（一）道光23年2月26日、161頁。
- *102 「湘郷公〔曾国藩〕は諧諷を好まれた」（俞樾著、張道貴・丁鳳麟標点『春在堂隨筆』卷一、江蘇人民出版社、1984年、10頁）。
- *103 『曾国藩全集』日記（一）道光20年11月17日、50頁。
- *104 『曾国藩全集』日記（一）道光22年11月15日、130頁。
- *105 『曾国藩全集』日記（一）道光22年11月9日、127頁。
- *106 『曾国藩全集』日記（一）道光22年11月3日、124-125頁。
- *107 『曾国藩全集』日記（一）道光22年12月11日、139頁。
- *108 『曾国藩全集』日記（一）道光22年12月16日、141頁。
- *109 『曾国藩全集』日記（一）道光23年3月26日、167頁。
- *110 『曾国藩全集』日記（一）道光22年11月7日、126頁。
- *111 『曾国藩全集』日記（一）道光22年11月26日、134頁。
- *112 『曾国藩全集』日記（一）道光23年正月11日、151頁。
- *113 『曾国藩全集』日記（一）道光23年2月12日、158頁。
- *114 直言で権貴（権勢があり高貴な人）を怒らせて排斥されて都を出て、河口を巡防、咸豊4年に職を

- 取り上げられる。咸豊10年に浙江巡撫・王有齡を助けて杭州を守り、太平軍に抵抗するが、翌年城破れて死ぬ（『清史稿辞典』1175頁）。
- * 115 『曾国藩全集』日記（一）道光23年2月16日、159頁。
- * 116 「致澄弟温弟沅弟季弟」道光22年9月18日、『曾国藩全集』家書（一）34頁。
- * 117 のちに貴州省で知府となる。『清史稿辞典』2839頁。朱保炯・謝沛霖『明清進士題名碑録索引』上海古籍出版社、2004年、2787頁。
- * 118 湘軍營官となり、のちに内閣中書に選用される（『曾国藩全集』書信（一）713頁、注1）。南豊県で太平軍に抵抗・反撃して亡くなる（陳霞村主編『文白対照全訳『曾国藩家書』』修訂本、改革出版社、1995年、1659頁）。
- * 119 辞官後は山東省や湖南省などの学院で主講をつとめる（『清代翰林伝略』304頁）。
- * 120 「致澄弟温弟沅弟季弟」道光24年5月12日、『曾国藩全集』家書（一）85頁。
- * 121 朱東安『曾国藩伝』27-28頁。
- * 122 姚鼐（1731-1815）、字は姬伝・夢谷、安徽省安慶府桐城県人、乾隆進士、庶吉士、礼部主事。四庫全書纂修官となり、完成すると辞職して帰郷し、江南の紫陽書院や鍾山書院で40年あまり主講をつとめた。桐城派と目され、惜抱先生と称された（『清史稿辞典』1401頁）。
- * 123 段玉裁（1735-1815）、字は若膺、江蘇省鎮江府金壇県人、戴震に師事〔師徒〕、乾隆25年の挙人、知県をつとめるが46歳で辞官、経史の学に通じ、とくに音韻に通暁していた（『清史稿辞典』1311頁）。
- * 124 『曾国藩全集』書信（一）14頁、注。「国子監学政」と書かれているが「学正」だと思われる。朱東安『曾国藩伝』23-24、28-30頁。黎庶昌撰「曾国藩年譜」卷一、12頁。湖北省漢陽の人である劉伝瑩は道光28年2月に病で帰郷したが、この年のうちに家で病没する（黎庶昌撰「曾国藩年譜」卷一、13-14頁）。曾国藩は親身に帰郷の心配をしてやった（「致劉伝瑩」道光28年、『曾国藩全集』書信（一）56頁）。
- * 125 「致劉蓉」道光23年、『曾国藩全集』書信（一）5-6、8頁。
- * 126 「答劉蓉」道光25年、『曾国藩全集』書信（一）22頁。
- * 127 『清史稿』卷四八六、13426頁。『清史稿辞典』1698頁。
- * 128 浅井邦昭「京師桐城派の成立について」『金城学院大学論集』人文科学編、第18巻第1号、六八（251）、七五-七六（244-243）頁。岳昇陽・黄宗漢・魏泉『宣南-清代京師士人聚居区研究』北京燕山出版社、2012年、226-237頁も参照。張裕釗、呉汝綸、薛福成、黎庶昌ら、いわゆる「曾門文学四弟子」は桐城文派の新分支を形成し、「湘郷派」と呼ばれた（朱東安『曾国藩』345-346頁）。
- * 129 前掲「京師桐城派の成立について」七二（247）頁。
- * 130 前掲『能静居日記』同治6年8月21日、1093頁。
- * 131 「致澄弟温弟沅弟季弟」道光22年10月26日、『曾国藩全集』家書（一）40-41頁。
- * 132 「致澄弟温弟沅弟季弟」道光23年正月17日、『曾国藩全集』家書（一）52頁。
- * 133 「致澄弟温弟沅弟季弟」道光24年11月21日、『曾国藩全集』家書（一）98頁。
- * 134 「致澄弟温弟沅弟季弟」道光25年2月1日、『曾国藩全集』家書（一）105頁。
- * 135 京官時代の曾国藩の経済生活については、前掲『給曾国藩算帳-一個清代高官の収与支（京官時期）』に詳しい。
- * 136 『曾国藩全集』日記（一）道光22年10月10日、116頁。
- * 137 「致澄弟温弟沅弟季弟」咸豊元年9月5日、『曾国藩全集』家書（一）223頁。
- * 138 『清代翰林伝略』327頁。のちに官は江蘇省松江知府に至る。蔵書家として知られ、朱学勤、丁日昌とならんで咸豊三大家と称される。

- *139 戴鸞翔、字は蓮溪、直隸省順天府宛平縣人、道光18年の進士、庶吉士、官は直隸永定河道に至る（『清代翰林伝略』309頁）。
- *140 「致陳源亮」道光25年、『曾國藩全集』書信（一）18頁。
- *141 「稟父母」道光26年正月3日、『曾國藩全集』家書（一）127頁。
- *142 四川省出身の門生ができたことで、祖父から困った頼み事をされたこともある。「祖父大人は四川漆を買うようにとのお言いつけだが、現在四川門生で都に留まっているのはわずか2人（中略）いずれも極貧の士だ。京からその家まで5000里あまり、四川から湖南が4000里あまり、あまりに遠い。（中略）省で高い値段で、最高の川漆を買うほうが良い」（「致沅弟季弟」道光26年4月16日、『曾國藩全集』家書（一）132頁）。
- *143 黎庶昌撰「曾國藩年譜」巻一、10頁。7月に都を發ち、保定で病にかかったが、閏7月に西安に着き、数日陝西巡撫・李星沅の役所で療養してからまた旅立ち、8月4日に成都に到着した。9月21日に成都から回節、11月20日に都についた。
- *144 「致澄弟温弟沅弟季弟」道光24年正月26日、『曾國藩全集』家書（一）71頁。
- *145 「致温弟沅弟」道光24年3月10日、『曾國藩全集』家書（一）75-76頁。
- *146 「稟祖父母」道光24年3月10日、『曾國藩全集』家書（一）74頁。
- *147 「通十舅」は、同日の祖父母あての手紙では「江通十舅」と書かれている（「稟祖父母」道光24年3月10日、『曾國藩全集』家書（一）74頁）。
- *148 「致温弟沅弟」道光24年3月10日、『曾國藩全集』家書（一）76-80頁。
- *149 「稟祖父母」道光24年8月29日、『曾國藩全集』家書（一）91頁。
- *150 「致澄弟温弟沅弟季弟」道光24年12月18日、『曾國藩全集』家書（一）102頁。
- *151 「致澄弟温弟沅弟季弟」道光25年5月5日、『曾國藩全集』家書（一）113頁。
- *152 「稟父母」道光25年7月16日、『曾國藩全集』家書（一）117頁。
- *153 「致澄弟温弟沅弟季弟」道光29年12月3日、『曾國藩全集』家書（一）200-201頁。
- *154 「致澄弟温弟沅弟季弟」道光30年正月9日、『曾國藩全集』家書（一）203-204頁。
- *155 「稟父母」道光30年3月30日、『曾國藩全集』家書（一）205頁。
- *156 黎庶昌撰「曾國藩年譜」巻一、15-16頁。曾國潢は咸豐元年「2月26日に都を出た」（「致温弟沅弟季弟」咸豐元年3月4日、『曾國藩全集』家書（一）207頁）。曾國藩は「澄弟が去ったあと、非常に偲んでいる。外出から帰ると部屋にいつてしまう。朝起きると部屋に訪ねてしまい、夜は人を呼びにやったりする。弟も道中でますます私のことを想っていることだろう」（「致澄弟温弟沅弟季弟」咸豐元年3月12日巳刻、『曾國藩全集』家書（一）208頁）と寂しがっている。
- *157 『曾國藩文化世家』77-78頁。黎庶昌撰「曾國藩年譜」巻一、9-12、21頁。
- *158 『清代翰林伝略』239-240頁。『曾國藩全集』書信（一）3頁、注1。
- *159 「致澄弟沅弟季弟」道光27年7月18日、『曾國藩全集』家書（一）154頁。
- *160 「稟祖父母」道光24年11月21日、『曾國藩全集』家書（一）98頁。
- *161 王夫之（1619-1692）、字は而農、号は姜斎、湖南省衡州府衡陽縣人、明・崇禎15年の挙人、明末清初の思想家、明滅亡後に衡陽石船山に帰隠したので船山先生と称される。同治初年に『船山遺書』が瀝刻される（『清史稿辞典』144頁）。
- *162 「答歐陽兆熊」咸豐元年、『曾國藩全集』書信（一）74頁。
- *163 「稟父母」道光25年5月29日、『曾國藩全集』家書（一）114頁。
- *164 「致澄弟温弟沅弟季弟」咸豐元年閏8月12日、『曾國藩全集』家書（一）222頁。
- *165 功により寧紹道となり、その後、按察使銜・布政使銜を加えられた。咸豐6年、武昌城外で戦死する。『清史稿辞典』2795-2796頁。『曾國藩全集』書信（一）79頁、注。黎庶昌撰「曾國藩年譜」巻四、

- 68頁。朱東安『曾国藩伝』38、54頁。
- *166 「致澄弟温弟沅弟季弟」咸豊元年6月1日、『曾国藩全集』家書（一）215頁。
- *167 「致澄弟温弟沅弟季弟」咸豊元年8月13夜、『曾国藩全集』家書（一）218-219頁。
- *168 「致澄弟温弟沅弟季弟」咸豊元年閏8月12日、『曾国藩全集』家書（一）222頁。
- *169 賀氏の嫡母は徐氏のようなのである。あるいは徐樹銘（?-1900、字は寿衡、号は伯澄・澗園、湖南省長沙府長沙人、道光27年進士、庶吉士、官は工部尚書に至る、『清代翰林伝略』330頁）の縁者か。
- *170 「致澄弟温弟沅弟季弟」咸豊元年10月12日、『曾国藩全集』家書（一）225頁。『曾国藩全集』書信（一）51、90、718頁参照。
- *171 「致澄弟温弟沅弟季弟」咸豊元年12月22日、『曾国藩全集』家書（一）227頁。
- *172 「致澄弟温弟沅弟季弟」咸豊2年正月9日、『曾国藩全集』家書（一）229頁。
- *173 官は陝西巡撫に至るが、のちに免官となる。『曾国藩全集』書信（一）5頁、注1。黎庶昌撰「曾国藩年譜」巻一、6-7頁。
- *174 「紀沢兄は3月21日に成婚と決まった。招贅ののち、7日ですぐ湘郷に帰れば、長くはない。（中略）聞けば、賀夫人は経史の学識が広く、礼法を深く知っているという。紀沢はあちらの家〔岳家〕に行ったら、黙ってきまりにしたがうように。おこなうべき儀式は細かくたずねておぼえ、時に臨んで慌てて〔忙乱〕、岳母に笑われないようにせよ。（中略）新婦が我が家にきたら、勤儉を教え、紡績して裁縫し、台所に入って酒食の相談をさせるように。この二つは、婦人のもっとも重要な仕事である。目上の者に孝行し、温和に同輩に待する。この二つは、もっとも重要な婦道である。しかし教えるのは少しずつにせよ。富貴の子女であり、労苦に慣れていない」（「致澄弟温弟沅弟季弟」咸豊6年2月8日、『曾国藩全集』家書（一）317-318頁）。前掲『曾国藩文化世家』70頁。潘德利・王宇『曾紀沢年譜』中国社会科学出版社、2011年、31-32頁。紀沢の婚姻については、「入贅の話は、絶対にだめである。我が郷には従来この例はなく、富貴の習気にそまる〔習〕ことを恐れる」（「致澄弟温弟沅弟季弟」咸豊5年8月13夜二更、『曾国藩全集』家書（一）304頁）と断固反対していたが、考えを変えたようである。男女は逆だが、陳家との婚姻のさいは、「陳家は正月28日を選んで入贅する」（「諭紀沢」咸豊11年12月14日、『曾国藩全集』家書（一）802頁）と書いている。陳源亮が咸豊3年に亡くなったからであろうか。新郎の家が苦境にあるとき、入贅婚の形をとることが多いと思われる。
- *175 『清史稿辞典』1720-1721頁。『清代翰林伝略』280頁。銭実甫編『清代職官年表』中華書局、1997年、2149頁。以下、『清代職官年表』と略記する。
- *176 「致澄弟温弟沅弟季弟」道光24年12月18日、『曾国藩全集』家書（一）102頁。
- *177 朱東安『曾国藩伝』32頁。『清史稿』巻三六三、11417頁。「曾国藩は穆彰阿に対して非常に感謝していた。穆彰阿が罷免されたあと、曾国藩は穆宅を通るたび、感慨を免れなかった。20年後、曾国藩が直隸総督赴任前に入京して謁見したとき、とくに穆宅を訪問している。のちに、天津に教案処理にいくとき、おそらく自分はもう入京の機会はないと思い、とくに手紙を書いて息子の曾紀沢にふたたび穆宅に行かせ、穆彰阿の息子の薩廉に気持ちを伝えさせた。道光30年に咸豊帝が穆彰阿を処罰したのは、曾国藩にまったく影響はなかったが、有力な後ろ盾を失った。それ以後、重大なとき、重大な問題にあうたびに、皇帝の身边には彼のために口をきいてくれる人は少なく、ことをするのは以前のように順調にいくのは難しく、道光30年から咸豊10年にかけて、清政府は彼に対して時に冷たく時にあたたかく、信じたかと思うと疑い、長い間地方の督撫大権を彼の手へ渡したがらなかった」（朱東安『曾国藩伝』35頁）。
- *178 『清代翰林伝略』237頁。『清史稿』巻三六三、11417頁。
- *179 『曾国藩全集』日記（一）道光23年3月6日、163頁。

- *180 『曾国藩全集』日記（一）道光23年3月10日、164頁。
- *181 「稟祖父母」道光23年3月23日、『曾国藩全集』家書（一）61頁。
- *182 『曾国藩全集』日記（一）道光23年3月13日、165頁。
- *183 朱東安『曾国藩』34頁
- *184 唐・房玄齡等撰『晋書』卷四十三、列伝第十三・山濤（そのうち子簡の項）、中華書局、1982年、1229頁に見られる言葉。もとは「爵人於朝、与士共之」（竹内照夫『礼記（上）』新釈漢文大系第27巻、明治書院、1988年、王制第五、191頁）。
- *185 「稟叔父母」道光25年10月1日、『曾国藩全集』家書（一）122頁。道光24年12月「7日、皇上が御門され、私は〔翰林院侍講・従五品から〕翰林院侍読〔従五品〕になりました〔転補〕。（中略）侍講が侍読に転ずるのは例によって謝恩しません」（「稟祖父母」道光24年12月14日、『曾国藩全集』家書（一）100頁）、道光25年5月「2日朝、皇上が御門辨事なされた。私は天恩を蒙り、詹事府右春坊右庶子〔正五品〕に昇進した」（「致澄弟温弟沅弟季弟」道光25年5月5日、『曾国藩全集』家書（一）112頁）、道光25年9月「24日に皇上が御門され、私は翰林院侍講学士〔従四品〕に昇任しました」（「稟叔父母」道光25年10月1日、『曾国藩全集』家書（一）122頁）。
- *186 前掲『清代典章制度辞典』710-711頁。
- *187 『宣宗成皇帝実録（7）』（『清実録』39）巻四一二、道光24年12月己亥條、166頁。
- *188 『宣宗成皇帝実録（7）』（『清実録』39）巻四一七、道光25年5月壬戌條、225頁。
- *189 『宣宗成皇帝実録（7）』（『清実録』39）巻四二一、道光25年9月壬午條、286頁。
- *190 「稟祖父」道光27年6月17日、『曾国藩全集』家書（一）147頁。「以内閣学士曾国藩為礼部右侍郎」（『宣宗成皇帝実録（7）』（『清実録』39）巻四六三、道光29年正月辛卯條、851頁）。
- *191 「致澄弟沅弟季弟」道光27年6月18日、『曾国藩全集』家書（一）149頁。
- *192 「以礼部右侍郎曾国藩兼署工部左侍郎」（『文宗顯皇帝実録（1）』（『清実録』40）巻一一、道光30年6月甲子條、183頁）。黎庶昌撰「曾国藩年譜」巻一、14-20頁。
- *193 「稟父母」道光29年2月6日、『曾国藩全集』家書（一）179頁。
- *194 「稟父母」道光29年4月16日、『曾国藩全集』家書（一）185頁。
- *195 「応詔陳言疏（道光30年3月2日）」『曾国藩全集』奏稿（一）8-9頁。
- *196 「致澄弟温弟沅弟季弟」咸豐元年6月1日、『曾国藩全集』家書（一）215頁。
- *197 「致澄弟温弟沅弟季弟」咸豐元年閏8月12日、『曾国藩全集』家書（一）222頁。
- *198 「致澄弟温弟沅弟季弟」道光25年4月15日、『曾国藩全集』家書（一）109-110頁。
- *199 「稟父母」道光26年3月25日、『曾国藩全集』家書（一）130頁。
- *200 「稟父母」道光27年正月18日、『曾国藩全集』家書（一）140頁。
- *201 「致陳源究」道光29年、『曾国藩全集』書信（一）62頁。
- *202 黎庶昌撰「曾国藩年譜」巻一、11頁。「今年は癩疾が大いにおこり、道光26年に似ている」（「致澄弟沅弟」咸豐9年11月14日、『曾国藩全集』家書（一）509頁）。咸豐11年にも「道光26、27年の生癩の状況と似ている。非常に苦しい」（「致澄弟」咸豐11年5月24日、『曾国藩全集』家書（一）729頁）。
- *203 「稟父母」道光25年7月16日、『曾国藩全集』家書（一）117頁。
- *204 「致陳源究」道光25年、『曾国藩全集』書信（一）19頁。
- *205 「致沅弟季弟」道光26年4月16日、『曾国藩全集』家書（一）131頁。
- *206 「稟父母」道光25年6月19日、『曾国藩全集』家書（一）114頁。「四弟から聞きましたが、家では連年熱毒を生じるものが8人とのこと、私もいれると9人です。おそらく祖先の墓に不潔なところがあるのでしょう。常に掃除してくださることを望みます。しかしみだりに土を掘って靈魂を驚か

- せてはなりません」(「稟父母」道光25年11月20日、『曾国藩全集』家書(一)125頁)。
- *207 「授翰林院侍講及四川正考官呈請代奏謝恩狀(道光23年8月4日)」、「遵議大札疏(道光30年正月28日)」、「応詔陳言疏(道光30年3月2日)」、「請設壇祈雨疏(道光30年3月4日)」、「条陳日講事宜疏(道光30年4月4日)」、「議汰兵疏(咸豐元年3月9日)」、「議復宋臣李綱從祀文廟疏(咸豐元年3月14日)」、「敬呈聖德三端預防流弊疏(咸豐元年4月26日)」、「謝署刑部左侍郎恩疏(咸豐元年5月27日)」、「武閣復命摺(咸豐元年10月17日)」、「備陳民間疾苦疏(咸豐元年12月18日)」、「平銀餉疏(咸豐元年12月19日)」、「謝署吏部左侍郎恩疏(咸豐2年正月25日)」、「請寬勝保處分疏(咸豐2年4月5日)」、「謝放江西正考官恩摺(咸豐2年6月13日)」。
- *208 「敬呈聖德三端預防流弊疏(咸豐元年4月26日)」『曾国藩全集』奏稿(一)24-27頁。
- *209 黎庶昌『拙尊園叢稿』(清末民初文獻叢刊)朝華出版社、2017年、卷三、二(209-210)頁。
- *210 祁寯藻(1793-1866)、字は叔穎・実甫、号は春圃、山西省平定直隸州寿陽縣人、嘉慶19年の進士、庶吉士、道光21年に軍機大臣、道光30年に体仁閣大学士、樸学を提唱して士人に推崇され、詩詞古文に巧みで、嘉慶・道光年間の詩壇領袖であった。季芝昌(1791-1861)、字は雲書、号は仙九、江蘇省常州府江陰縣人、道光12年の探花、道光29年に軍機大臣、官は左都御史、閩浙総督にのほる(『清代翰林伝略』255、290頁)、『清代職官年表』149頁。
- *211 「諭内閣、曾国藩條陳一摺、朕詳加披覽、意在陳善責難豫防流弊、雖迂腐欠通、言尚可取、朕自即位以来、凡大小臣工章奏、於国計民生用人行政諸大端、有所裨補者、無不立見施行、即敷陳理道、有益身心者、均留置左右、用備省覽、其或窒礙難行、亦有駁斥者、亦有明白宣諭者、朕欲求献納之実、非沽納諫之名、豈得以毋庸議三字付之不論也、所奏除廣西地利兵機、已令查辦外、余或語涉過激、未能持平、或僅見偏端、拘執太甚、念其志在進言、朕亦不加斥責、至所論人君一念自矜、必至喜諛惡直等語、頗為切要、自惟藐躬德薄、夙夜孜孜、時存檢身不及之戒、若因一過當之言、遂不量加節取、容納不広、是即驕矜之萌、朕深思為君之難、諸臣亦当思為臣之不易、交相咨儆、庶坐言起行、国家可収実効也」(『文宗顯皇帝実録(1)』(『清実録』40)卷三二、咸豐元年4月壬午條、446頁)。
- *212 姻戚の一人と思われる。咸豐8年に歐陽秉銓(歐陽夫人の兄)の手紙を、おそらく衡州から曾国藩のもとに届けてくれた人の名が汪亦棠である(「致歐陽秉銓」咸豐8年12月30日、『曾国藩全集』書信(一)771頁)。これも汪家の人かもしれない。
- *213 「致澄弟温弟沅弟季弟」咸豐元年5月14日、『曾国藩全集』家書(一)212-213頁。後年、曾国藩は洪亮吉の「上成親王書」について嘉慶己未に叱責され新疆にやられたもので「当時は正義の名声[直声]が天下を震わせたが、いま見ると、それほど禁忌に触れるところはない」(『曾国藩全集』日記(二)同治元年正月24日、714頁)と述べているが、このときの上奏が念頭にあったのではないだろうか。
- *214 「復羅澤南」咸豐元年、『曾国藩全集』書信(一)79-80頁。
- *215 のちに安徽巡撫になるが、咸豐3年12月、廬州城が太平軍に破られ、投水して死ぬ。『曾国藩全集』書信(一)74頁、注1。『清史稿辞典』675頁。黎庶昌撰「曾国藩年譜」卷一、11、33頁。朱東安『曾国藩伝』37頁。
- *216 『曾国藩全集』書信(一)106頁、注1。
- *217 『曾国藩全集』書信(一)1頁、注1。
- *218 「致澄弟温弟沅弟季弟」咸豐2年正月9日、『曾国藩全集』家書(一)229頁。
- *219 朱東安『曾国藩伝』44-45頁。
- *220 「致澄弟沅弟季弟」道光27年2月12日、『曾国藩全集』家書(一)142頁。
- *221 「致澄弟沅弟季弟」道光28年正月21日、『曾国藩全集』家書(一)164頁。
- *222 「致澄弟温弟沅弟季弟」道光29年4月16日、『曾国藩全集』家書(一)187頁。

- *223 「致澄弟温弟沅弟季弟」道光29年6月14日、『曾国藩全集』家書（一）192頁。
- *224 「致澄弟温弟沅弟季弟」道光29年10月4日、『曾国藩全集』家書（一）197頁。
- *225 「致澄弟温弟沅弟季弟」咸豊元年9月5日、『曾国藩全集』家書（一）222頁。
- *226 「致澄弟温弟沅弟季弟」咸豊元年閏8月12日、『曾国藩全集』家書（一）222頁。
- *227 薩迎阿（?-1857）、鈕祜祿氏、字は湘林、鑲黃旗滿洲、嘉慶拳人、官は伊犁將軍、陝甘總督に至る（『清史稿辭典』2665頁）。
- *228 黎庶昌撰「曾国藩年譜」卷一、19-20頁。琦善には、咸豊2年に、吉林で国のために尽くして罪を贖う〔効力贖罪〕という判決がでたが、まもなくゆるされて戻った（『清史稿』卷三七〇、11502頁）。
- *229 前掲『拙尊園叢稿』卷三、二-三（210-211）頁。この部分の直前（卷三、二（210）頁）には、「大学士・琦善公は、番案によって罪を得て刑部の獄に入った。〔罪を〕認めようとせず〔不肯承〕、薩迎阿の査辦は事実でない、自分を陥れようとしたと言い張った。薩公はそのとき新疆で〔琦善の〕仕事を代行していた。大臣が事件を査辦するときは必ず司員を連れて行く。ある日、会訊の席につくと、刑部〔滿〕尚書・恆春は、薩公の連れて行った司員を呼び出して問いただす〔備質〕と宣言した。公は驚いて、それはどういうことかと聞いた。恆公は旨があると言った。公は旨があるならどうして早く見せないのかと言った。恆公は、論旨を面奉した〔直接いただいた〕のだと言った。公は言った。論旨が司員を逮捕し罪に問うのに、どうして面奉でよいことがあろうか。某もまた刑部で会審にあたるもの、面奉していないので附和することはできない。司員は微曹とはいえ、これも会訊官である。論旨がまだその罪を正していないのに、先に逮捕して罪に問うては、今日堂で会訊するものは、どうして自ら危ぶまずにいられようか。今後、大員に罪があったら、誰がかかりあおうか。どうしても召喚して尋問するというなら、奏請奉旨してからでなければならぬと。四坐は恐れぞっとして、この話はそれまでとなった」と記されている。
- *230 「以（中略）礼部右侍郎曾国藩為江西鄉試正考官」（『文宗顯皇帝實録（1）』（『清實録』40）卷六三、咸豊2年6月己丑條、839頁）。
- *231 「謝放江西正考官恩摺（咸豊2年6月13日）」『曾国藩全集』奏稿（一）39頁。
- *232 毛鴻賓（1806-1868）、字は寅庵・翊雲、号は寄雲・菊隱、山東省濟南府歷城縣人、道光18年の進士、庶吉士、官は湖南巡撫などを経て両広總督にのぼる（『清代翰林伝略』311頁）。曾国藩の「同年」である。
- *233 黎吉雲（原名・光曙）、字は雲微、号は樾喬、湖南省長沙府湘潭縣人、道光13年の進士、庶吉士、官は江南道監察御史にのぼる（『清代翰林伝略』297頁）。
- *234 黄倬、字は樹階、号は恕皆、湖南省長沙府善化縣人、道光20年の進士、庶吉士、官は吏部左侍郎に至る（『清代翰林伝略』315頁）。
- *235 「私の同年の王溥（静庵）、陝西蒲城人、工部主事」（「致郭高燾」咸豊8年11月10日、『曾国藩全集』書信（一）738頁）。
- *236 袁甲三（1806-1863）、字は午橋、河南省陳州府項城縣人、道光15年の進士である。のちに捻軍と戦う（『清史稿辭典』1428頁）。袁世凱の叔祖（祖父の弟）である（朱東安『曾国藩伝』487頁）。
- *237 「論紀沢」咸豊2年7月25夜、『曾国藩全集』家書（一）231-235頁。
- *238 「論紀沢」咸豊2年7月27日、『曾国藩全集』家書（一）235-236頁。
- *239 「論紀沢」咸豊2年8月8日、『曾国藩全集』家書（一）236-239頁。
- *240 『清史稿辭典』1720-1721頁。『清代職官年表』1696頁。
- *241 「論紀沢」咸豊2年8月13夜、『曾国藩全集』家書（一）240頁。
- *242 「黄金堂は双峰県荷葉鎮良江村の腰里にある。曾家はここに2カ所の田莊を持っていたので、上腰里と下腰里に分かれていた。黄金堂は下腰里と呼ばれた」（趙世榮『曾国藩の故園』中華圖書出版社、

2009年、78-79頁)。同書80-82頁も参照。

- *243 「論紀沢」咸豊2年8月26日、『曾国藩全集』家書（一）240-241頁。
- *244 「論紀沢」咸豊2年9月18日、『曾国藩全集』家書（一）241-243頁。
- *245 黎庶昌撰「曾国藩年譜」卷一、21頁。「年譜」には名は「柄銓」と書かれている。
- *246 「前任丁憂侍郎曾国藩籍隸湘鄉、現聞在籍、其於湖南地方人情、自必熟悉、著該撫伝旨、令其幫同辦理本省團練鄉民搜查土匪諸事務、伊必尽力、不負委任」（『文宗顯皇帝實録（1）』（『清実録』40）卷七七、咸豊2年11月下、乙亥條、1019頁）。
- *247 「致欧陽秉銓」咸豊2年12月15日、『曾国藩全集』書信（一）94-95頁。
- *248 「『曾文正公嘉言鈔』序（1916年）」『梁啓超全集』第十卷、北京出版社、1999年、第5冊、2933頁。岡本隆司・石川禎浩・高嶋航編訳『梁啓超文集』岩波文庫、2020年、402頁も参照。

Early Life of Zeng Guofan: 1811–1852

Kaori Asanuma

This paper reports the early life of Zeng Guofan, best known for his role in suppressing the Taiping Rebellion. Zeng Guofan was born in a rural part of Hunan Province, a rather backward region at the time, and he was the first *jinshi* in his family. He was at first a Neo-Confucianist but went on to follow the Tongcheng School, which emphasized the elegant prose of the Tang and Song dynasties. Zeng Guofan worked hard to cultivate virtue, and he devoted himself to providing an education for his younger brothers. The comfortable life that he enjoyed at Hanlin Academy and in the Household Department of the Imperial Heir allowed him to pursue his studies and to make many good friends. His closest friends, who were from the same region or passed the examinations at the same time as him, some of whom became relatives through the marriage of their children, became his most reliable partners during the days of fierce battles against the Taiping Army. Zeng Guofan was promoted exceptionally rapidly, mainly due to his mentor Muzhanga, a favored retainer of Emperor Daoguang, became the Academician of the Grand Secretariat (official rank 2) in 1847 at the age of 37 and was soon appointed the vice-minister of the Board of Rites. Zeng Guofan submitted a letter of admonition to the new emperor, Xianfeng, and barely escaped punishment for this. While mourning for his mother at home, Zeng Guofan was ordered by the emperor to help maintain security in Hunan.